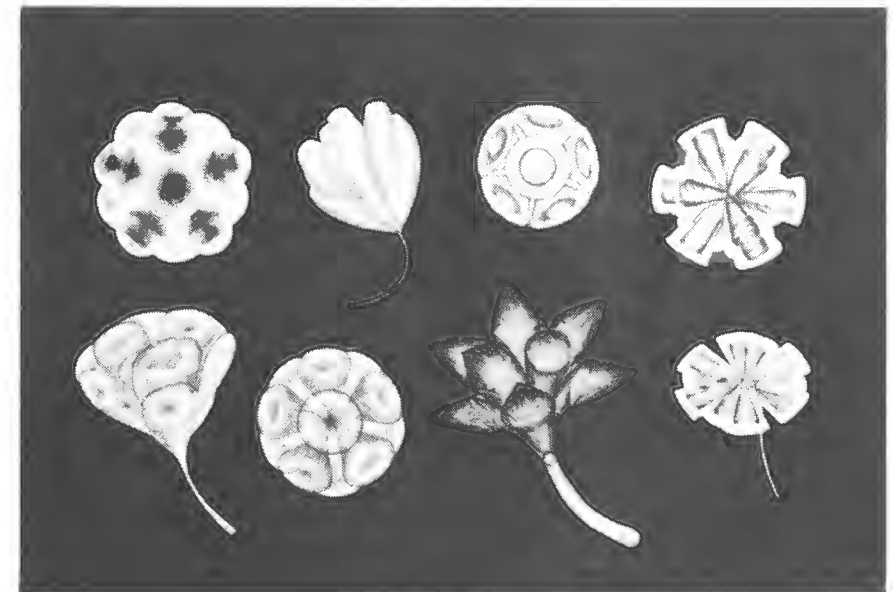


神戸大学
教養部

広報

NO. 62

昭和58年 3月30日
教養部広報委員会



目 次

— 巻 頭 言 —	
新入生諸君へ	長谷川 正知..... 1
— 特 別 寄 稿 —	
呪縛からの脱却	小島 輝正..... 2
— 退 官 の 辞 —	
アンタ大学のナンナノサ	小島 輝正..... 4
去りゆく	和田 實..... 7
— 転 任 の 辞 —	
32 年半	前野 繁..... 8
三年間	鍛冶 哲郎.....10
— 新任教官紹介 —	
自己紹介	原 克.....11
サイバネティクスと体育	河辺 章子.....12
私は神大卒業生	原 俊雄.....13
GRADE CONSCIOUSNESS	Yutaka Yamamoto.....14
— 特 集 —	
教養部教官の研究内容紹介	16—30
— エ ッ セ イ —	
西も東も	依田 博.....31
KOMMUNIKATION DURCH KUNST	Sigrid Karkavelas.....34
北京にて	中川 正之.....36
フンボルト研究員として	森井 俊行.....37
— 学 生 便 り —	
このごろ思うこと	[REDACTED].....40
INTRODUCING MALAY SONGS	[REDACTED].....41
— 教養部のうごき —	
人事異動	44
学生自治会との交渉経過	44
第二課程学生自治会との交渉経過	44
編集後記	48

表紙カット：「4次元の花」

本文カット：ジークリット・カルカヴェラス，本学学生・酒井 啓

新入生諸君へ

教養部長 長谷川 正 知



大学の合格発表以来，新入生諸君は多くの人々から繰り返し「おめでとう」と言う祝福を受けて，今や大学生活への期待に夢をふくらませていることであろう。しかし大学入学がめでたいかめでたくないかは，実はこれからの4年及至6年の大学生活をどのように過し，どのようになって社会に出て行くかできまらることであり，そのとき真に自分で振り返っておめでとうと言えるようであってほしいものである。

それぞれ自分の目指した学部，学科に入学したからには，まずは専門知識を身に着けることに大きな期待を持っていることであろう。それは当然であるが，大学生活では，専門知識の修得と同時に，それぞれが自己の人間を作ることが，もう一つの重要な目標であることを忘れてはならない。高等学校から大学に入ってきたばかりの学生諸君が大学を出るときには，それぞれに大きく人間的に成長しているのをわれわれは毎年見てきているし，社会の諸君に対する期待も，専門家としての期待もさることながら，その豊かな教養に対する期待が大きいのである。高い専門知識を持つ者程それに相応しい教養を持たなければならない。大学に専門課程と教養課程の二つの課程が置かれているのは，このような大学教育の二つの柱を考えてのことである。だが人間を作ると言うことは，専門知識の修得とは異なり，単に教養講座と言った講義を聞くだけでできることではない。専門課程，教養課程，を問わず大学の全生活を通して自分自身で作り上げて行かなければならない問題である。その点では本学のような総合大学の教養課程は，文学から工学，医学に対するすべての専攻の学生諸君が一堂に会して共に大学生活を送る場であり，あらゆる専門の教官が揃っているまことに恵まれた環境である。諸君は大いにこの環境を生かし，授業のみならず，友人との交友，教官との接触を通して布広い自己の形成を心がけてもらいたい。

大多数の諸君は今までは入学試験を最大の目標に勉強してきたであろう。親ごさんや先生方の懇切な指導とはげましのもとに，諸君はその重圧から開放されることを夢見ながら一途に勉強してきたことと想像する。今や大学に入ってこれらの枠から解放され，真に自由に自分自身の勉強のできる立場になったのである。これこそが真の勉強であり，それを助けてくれる環境は十分とは言えないまでも不足はない。自己形成の糧となる図書は図書館に揃っている

し，議論する友人にも事かかない。のびのびと自由にはばたけばよいのである。だが目先の目標になれば，よってたかつての指導になれた多くの諸君にとってこのような大学の自由な環境に適応することは思う程容易なことではない。今までの受動的な勉強とはちがって，まずは主体性を確立しなければならない。最初は目標を失ってぼう然とし，はては何もすることがなくなってしまう。無重力の宇宙空間にほうり出されたようなものである。まずは自分が何を求め，何をしようとしているかを知らなければならない。目標が見つかったら遥か彼方で容易には近付きがたいであろう。しかし目標がきまれば一歩ずつでも近づく努力をすることができる。一段上ればまた道は見えてくるであろう。一冊の本を読み上げることがまずは目標にすればよい。道にまよっても決して操縦桿を離してはならない。今までのように誰も運転をしてくれないのである。でなければひもの切れた宇宙遊泳のように宇宙をただよい続けることになってしまう。実際このようになる人が少ないのである。これからの勉強は自分自身の勉強であり，するもしないも自由である。しかし結果はすべて享受しなければならない。人のせいにするのではない。一年浪人すればすむことではなく，自分の一生の生き方を左右することにもなるのである。このことの自覚が第一歩である。

諸君がこの4及至6年の大学生活を終えて社会に出るとき，確固とした自身を持って自己の道を踏み出すことを願っている。今そのための出発点に立ったところである。早く自己の主体性を確立し，自由な勉強の環境を享受してもらいたい。そのときこそ教養部のキャンパスに若々しい生気がみなぎるのである。 (化 学)

呪縛からの脱却

小島輝正

われわれは、生涯の間に、おびたしい数の他者と接する。群をなして生きる動物である人間にとってそれは避けることのできぬ条件である。

われわれの生涯は、こうして次から次にわれわれのまえに現れる他者とさまざまな関係を取り結ぶことによって推移する。その対他関係のあり方が、われわれの人生を成立させ、同時に規定もする。

他者をいかようなものとしてとらえるかは、一人の人間にとって、おそらく決定的な意味をもっている。それは、他者だけではなく、自己をいかようなものとしてとらえるか、ということとわちがたく結びついているからである。他者規定は、とりも直さず自己規定である。

まず、基本的な岐れ道が一つある。他者を、自己と homogène なものとしてとらえるか、または hétérogène なものとしてとらえるか、である。

他者を自己と homogène なものとしてとらえるというようにすることがそもそも人間にありうるか、hétérogène だからこそ他者なのではないか、という疑問はむろん成り立つ。しかし、人間は、(何歳までかといわれると正確な答えは私にできないが、少なくとも生長のある段階まで) 他者を自分と異質なものと考えたことはない。赤ん坊同志は、親や周囲がそれを妨げないかぎり、いつまでも仲良く遊びつづけるだろう。人間に、他者を hétérogène なものとして意識させるのは、したがって、人間に本来内在する自然の性向ではない。それは、ある時期以後に「外」から吹きこまれ、教えこまれる idée である。

われわれが、他者を「異質」なものとしてとらえて、そのことの妥当性を疑わないのは、いつか、どこかで、だれかに、そのことを教えられたからである。しかも、長じてなお、しばしば生涯、その呪縛から解放されることが困難なほど、くり返しくり返し教えられたからである。

他者を異質なものとしてとらえるとき、次に必要なのは、その他者と自己との比較である。つまり、ただ「異なる」というだけではすまないで、どこかどう自分と「異なる」のか、という意識が当然ついてまわる。そして、最も不幸なことは、その「異質」概念のなかに「優劣」「上下」の概念がひそかにもちこまれることである。いうまでもなく、これも、いつか、どこかで、だれかによって、人為的に、もしくは慣習としてもちこまれるものである。試験成績の順位や、大学や就職先の著名度による他者との

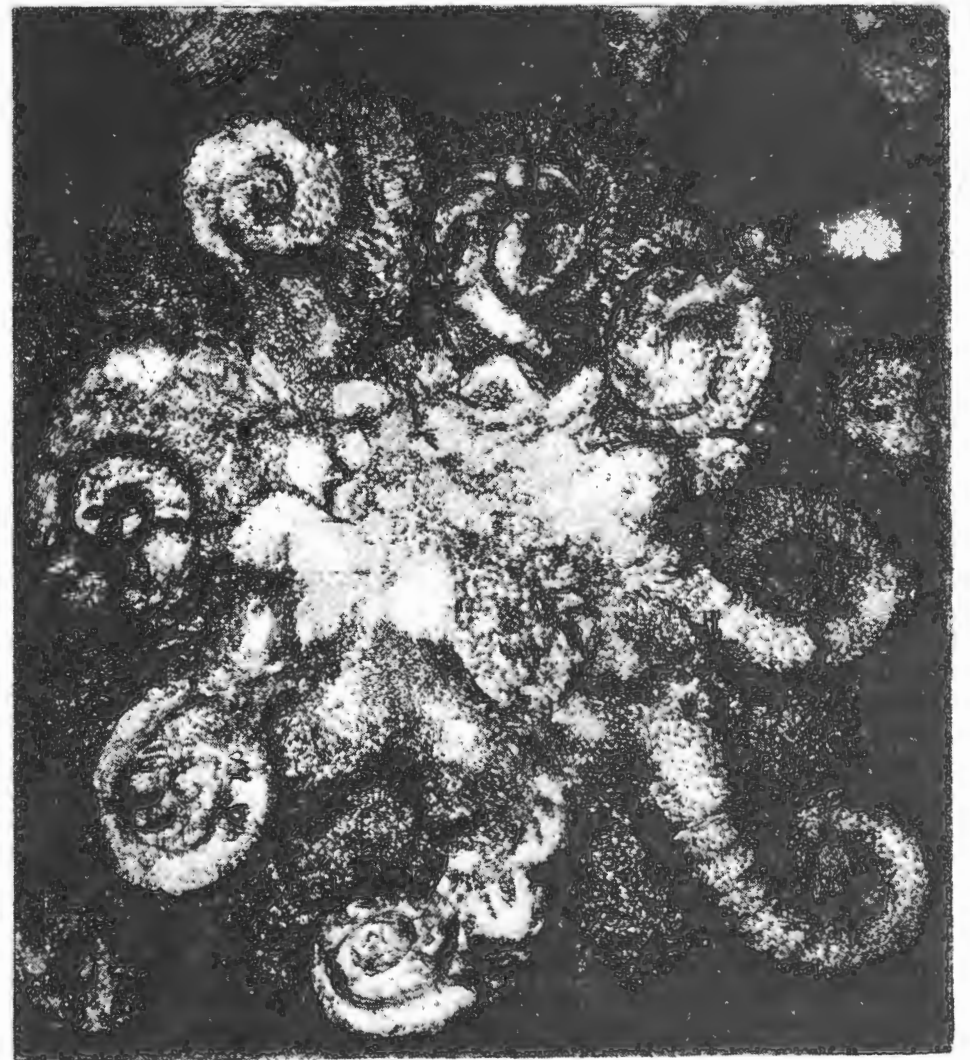
優劣関係などは、その最たるものであろう。

この「優劣」「上下」概念による他者=自己規定の最大の不幸は、一人の人間が、ある他者との比較において「劣」の位置にあると全く同時に、他のある他者に対して「優」の位置にありうる、ということにある。BはAより劣っているが、Cより優れている。おれはあいつよりは「下だが」、こいつよりは「上」だ。

こういう「優劣」「上下」のイエラルシーのなかでは、ある他者に対する「劣意識」は、かならず、他のある他者に対する「優意識」を伴っている。伴わざるをえない。なぜならば、そのなかで、人は、だれかより「上」だという心理的代償なしには、だれかより「下」だという自己規定に耐えることができないからである。こうして、このような社会的価値体系はつねに「より下」を必要とする。もし、それがなければ、人為的にそれをつくり出す。

われわれが、もし、人間の本当の平等を実現することを希望するならば、このような「優劣・上下」による自他関係の人為的規定を否定することから始めなければならない。そういう idée (これを「偏見」といっても「先入観」といってもいいが) を無意味なものとして排除することから出発しなければならない。他者を自己との、そして自己を他者との序列比較によってとらえることをやめること、さらにもう一歩さかのぼって、あらゆる他者、つまりは、あらゆる人間を、ひとしく人間である自己と、人間である点において無条件に homogène な存在としてとらえることが必要である。

このことは、われわれが、他者との比較という呪縛から脱け出て、真の主体性を回復することをも意味している。あたえられた一切の先入観や偏見から自由であることこそが、人間の主体性を保証する最も確実な条件だからである。(文 学)



Karkavelas 作 エッチング
(34. p 参照)

アンタ大学のナンナノサ

小島輝正

はじめに——以下の文章は、昭和51年に、当時まだ続いていたこの大学の学生雑誌「展望」22号に書いたものである。妙な題をつけているが、これはそのころ流行った「アンタアノ子ノナンナノサ」という歌の題をもじったものである。

それからまた7年ほどたっているのだから、最初の方の年数など勘定のあわないところもあるが、この本質は今も変わっていないと思われるので、わずかな補正をのぞいて、あえてそのまま再録させてもらった。

「広報」担当委員からの希望は、「退官」に関しての一文を、ということだったが、あまり殊勝なお別れの挨拶や懐旧談は私の柄ではない。また、かりにそういうものを志したとしても、書くことの趣旨は多分これと同じようなことになっただろう。

「教養部」の制度改革の話がはじまったのが、そもそもの頃からだったか、記憶もさだかでないが、その「教養部」に20年、それ以前の「御影分校」時代から数えると32年9ヶ月「キョーヨー」にいた私が辞めるころになって、「教養科学部」案がようやく具体化しつつあることを思うと、既往の思いにこだわることを最も不得手とする私も、いささかの感慨なきにしもあらずである。

神戸大学に教養部なるものが発足してから満12年になる。若い人から見れば、はるか昔の話と思われるかもしれないが、私のように昭和25年からこの大学にいるものからみれば、あっという間に経った12年である。新制大学の発足は昭和24年だから、現在までの27年の歴史からいえば、教養部のなかった期間の方が長い。教養部の歴史はまだ浅いのである。

だが、それにしても、キョーヨーという呼称はすでにすっかり定着してしまった感がある。今ではだれもがそれを口にして、ほとんど抵抗を感じないようだ。しかし、はじめは決してそうではなかった。

なぜかといえば、理由はきわめて簡単である。大学のなかに「学部」でない研究・教育組織が存在するということが人に容易に馴れなかったからである。大学ばかりではない。世間には、今でも、「教養部」というかわりに「教養学部」という人が沢山いる。大学のなかでは最早定着したかにみえるこの呼称は世間一般では必ずしも通用しない。たとえばタクシーにのって、「神戸大学の教養部」と行先を告げる



と、「ああ教養学部ですね」と訂正されることがある。話し好きな運転手さんになると、「教養学部いうたり教育学部いうたり、大学いうところはやこしいですな」とお叱りを蒙ることがある。まさかそこで教養部が断固として教養部であって教養学部でも教育学部でもない所以を滔々と陳述するわけにはいかないから、こちらはひたすら恐縮するほかはない。そして、そんなとき、わがキョーヨーあるキョーヨーの教官たちは、おのれの位置をかえりみて、そこはかとなき心の疼きをおぼえるのである。

逆にこんなこともある。これは、今日の大学についてある程度知識をもっている方々の場合である。たとえば酒場のカウンターでお隣りの神士と何かのはずみで口を聞くことになる。おしゃべりなママか何かかいて、「こちら神戸大学の先生よ」とかなんとか口をすべらす。すると件の神士が一膝乗り出して聞いてくる。「ほほう、学部はどちらですか」。その際のキョーヨー教師の返答はなかなか微妙である。「教養部です」と正面切って答えられる誇り高い人物は、まずもって稀である。大ていはその前に「いや」とつく。つまり、「いや、教養部です。」ということになる。さらにデリケートな神経の持主になると、「いや、教養の方です」と、火遁水遁ならぬ口遁の術を用いる。しかも、問題は次の瞬間にある。その返事を聞いた件の神士の表情に表われる瞬時の変化を、わが感受性に富んだキョーヨー教師たちは決して見落さない。そして、「ああ教養部ですか」という相手の口調の隠微なる変化をも決して聞き洩さない。そして「部」と「学部」と、その一字の差のもつ盤石の重みに耐えながら、途端に苦くなったグラスの酒をのみますのである。

かくの如きはいわれなき教養部教師のひがみにす

ぎぬというご意見もあろう。名として「学」がつこうとつくまいと、さしたる違いはない。問題は名称よりも中味ではないか。現にわが神戸大学の教養部は、学部でこそないが、学部なみの自治と権利とを保障されているのではないか。学部と同様に教授会をもち、人事権の独立も予算の決定権ももち、評議会にも学部と同数の三名の評議員制度上あらゆる面で学部と対等の扱いを受けているのではないか。予算の規模に至っては、学生数の多さに比例して他のいくつかの学部よりはるかに潤沢ではないか。

まことにご尤もである。その自治と権利とを獲得するために、教養部発足当時の教官たちがいかに獅子奮迅の戦いをしなければならなかったか、という昔話は別として、たしかに現状はお説の通りである。

しかし、それにもかかわらず、教養部がひっきょう教養「部」であって「学部」ではなく、教養部の先生があくまでも教養部の先生であって学部の先生ではないという事実は厳然として残る。名は体をあらわす、と昔の人はうまいことをいったものである。なるほど、組織としては、教授会もあり、人事権も予算の決定権もある。しかし、それらのものは、教養部成立当時の事情を考えれば、教養部がまさに「学」ぬきの教養部たることをうべなう代償としてあたえられたものである。あるいは、教養部教官が、「学ぬき」部の教官たることを引き受ける代償としてあたえられたものである。

誤解を生じないように早目に断っておくが、教養部が「学ぬき」部であるということは、そこに属する教師が「学ぬき」である、または「学ぬき」であってよしい、ということの意味するのではない。もしそうであるなら問題はむしろ単純明快である。教養部の教師たちは、テキスト一冊片手につまんで教室に出かけて行って、ドイツ語やら数学やらのABCか、精々DEFのあたりをサラサラと講釈して、用事がすんだらさっさと家へ帰って水割りでもチビチビやりながらホームドラマだかプロレスだかを心おきなく鑑賞して、眠くなったらさっさと寝てしまえばいいのである。なにも他人の書いたしちむずかしい学術論文を読んだり、研究会や輪読会をやったり、はては胃の痛いのを我慢して自分も論文を書いたり、頬のこけるほど勉強して博士になったりする必要はないのである。そして、わが教養部も、「学ぬき」どころか、「部」などというまぎらわしい看板も返上して、神戸大学予科とか、いっそのこと神戸大学予備校とかに看板を塗りかえてしまえばいいのである。

ところが、なかなかそうは問屋が卸さぬところが、教養部教師一同のつらいところである。ABCやDEFのかたわら、やはり勉強はせねばならず、論文

も書かねばならぬ。喰うか喰われるかというほどの激甚な生存闘争は、さすがにキョーヨーある神士の集りだけあって、眼に余るほどにはないが、それでものんびりかまえていけば、片手片足くらいはいつ囃みちぎられないとも限らない。それに教養部教師一同、素性をただせば何れもれっきとした勉強好きであって、その勉強好きがすでにホビーの域に達した大人物もいるくらいだから、本を読むな、辞書をひくな、といっても、この癖はなかなか直るものではない。暇と隙を見つけては本を読む、その読んだ本を種にしては人に論争を吹っかけるという習性が身についたのが多くて、プロレスで一人水割りをチビチビという穏健無害なのは減多にない。これを要するに教養部教官は学ぬきどころか、自己の外からも内からも「学」との悪因縁を絶ちきれぬのである。

この辺の事情がお分りにならぬと、「学ぬき部」教官の苦衷はなかなか察して頂けない。同じ大学教師である学部諸先生方にも察して頂くににくいから、まして学生諸君には察しのつくはずがない。

教養部にこういう一口話がある。ある若い教官が学生にコンパ出席を頼れた。ちょうどその晩は、ある研究会に出ることになっていたもので、その旨をいって断ると、「え？先生も研究しはるんですか」と、心底いぶかしげにその学生がいった、というのである。人一倍研究心旺盛なるその若手教官がとっさにどう返事したかは聞き洩らしたが、その話を聞いた教官一同、身につまされてただただ苦笑するほかはなかった。その学生におそらく悪気は全くなかったのである。教室でABCを熱心に教えている先生が、研究などという厄介なことまでしなければならぬとは何とお気の毒な、という善意がその思わず出た問いにはむしろ含まれていたのだろう。そして、その問いは、教養部の学生の、全部とはいわぬまでもほとんどが教養部教官の全部に対して発する可能性のある無邪気な問いである。

なぜなら、学生諸君にとって教養部はまさに学部に進む前にやむを得ず抜けねばならないトンネルであるにすぎない。つまりは、高校と本当の大学との間に設けられたもう一つのちょっとした厄介な関門、あっさりいってしまえば「予課」「準備課程」であるにすぎない。そして学生諸君がそう思うのは別に彼らの心得違いであるわけではないので、いまの制度から言えばまさに事実はその通りなのである。したがって、そういうところでABCやDEFをせせと教えている先生は、同じ大学の先生でも、研究などという本当の大学の先生がやるような難しいことはしなくてもいいのだろう。彼らがそう推測するのは少しも奇体ではない。むしろそう思うのが、順

去りゆく

和田 實



いま、停年を迎える私に、鳴門教育大学という国立大学が新設された。その国語学に採用されることになった。昭和59年の春に開講、まず大学院からはじまる。方言はまた事情がちがうだろうが、アクセントのことは、大学院でも、かりに中学でも、同じ出発点から私は始める。学説・りくつは二の次で、自分のことばのアクセントがわかるようになる。例えば仮名2字に当る「山」なり「風」なり「春」なり……の名詞が何十何百とあるのを自分自身の方言に関して、同じアクセントの語どうしに分けてみる。分けて3種あるか4種あるか、こういう作業は中学生にも出来る者にはすぐ出来るし、大学生でも出来ない人はなかなか出来ない。そういうアクセント意識を自覚させることから始めなければならない。これまでの経験によると、意識明瞭で、アクセントというものに眼が開かれて、一挙に打ち込んでしまう聴講者が、すぐれた卒業研究へと伸びて行った。そういう学生との出会いいかんであった。とすると各自のテーマがすでに確定している大学院生に、アクセント研究との新鮮な出会いを感じさせ得るかどうか、必ずしも期待できない。

わが教養部で、私には本職でなかった国文学でも、学生に強い興味を与え得たことがある。国文学概説の、LL教室でビデオを使った古典劇の鑑賞は、何人かの学生を芝居がわかるようにさせることが出来たと思う。「細雪」の講読——といっても昭和10年代の歴史・風俗を調べて、オリジナルな資料から作品の写実性いかんを検証させる演習では、考証ということの興味を知ったかして、一部の学生は単位を取ることに以上の熱意を見せたものだった。

鳴門教育大学の大学院に赴任して、自分の専門を講じて、もしや、大学院生なるがゆえに、かえって各自のテーマでないことには大して反応を示してくれないということになったら、神戸大学を離れた私は、さぞ教養部での生涯をなつかしむことになるであろう。(文学)

神戸大学の誕生・成長とともに過ごしてきた生涯であった。戦時の、大学半年繰り上げ卒業が昭和17年9月、兵庫師範学校に勤めはじめたのが19年、それから足かけ40年になる。戦後の24年に新制神戸大学ができるまで師範学校が教育学部の母胎となったが、私は「教養課程」へまわされた。教養課程は神戸と姫路とに分れ、双方とも国文学2名・国語学1名の定員があって、私は姫路の国語学の専任講師に採ってもらったのである。

新制大学発足以来という教官はほかにまだ居る。けれども、そういつてももう、さすがにまれな存在になってしまった。

このたび最終講義をやれと言われて「東京アクセント関西アクセント」と題をつけたが、私は国語学のうち日本語のアクセントを専攻している。恩師は、アイヌ語研究で高名の金田一京助先生で、先生に就きたくて国学院大学に入った。先生の名著『国語音韻論』をふと手にしたのがきっかけである。アクセントというものが学問の研究対象になることを知って、これがやってみたくてたまらなくなったのである。こんな打ち込めるテーマはほかになかった。アクセントはそのころ新興の研究分野で、いくらでも問題がころがっており、非常にやりがいがあった。金田一先生からアクセントの講義を受けたことはなかったけれども、しあわせなことに令息の春彦氏がその方面の新進気鋭だったから、具体的なことは令息から教わった。たぶん私が春彦氏の弟子第一号であろう。教わりつつ、しかしそのうち私は私独自の方法を得て行ったのである。

ところで神戸大学が始まってみると、国語学だけでは持ち時間が少く、やがて国文学も持つことになった。いろいろ手さぐりしてみるうち、源氏物語、竹田出雲の浄瑠璃、谷崎潤一郎の「細雪」といったあたりがおもなだしものになった。本職の国語学の授業もあれこれ試みたが、教養部の半年2単位で一往まともりがつくものとして、キリシタン資料の平家物語かイソップ寓話集を読みつつ、日本語の変遷を説く、というのが一番うまく行くことに落ち着いた。教育学部へ出講しては、これも当初国語学の概説や文法やいろいろやったが、そちらにも専任の国語学定員が来てから、私への注文は多くアクセントであった。方言を講じたこともある。大阪・神戸・東播磨の語法、東播磨を例にとった方言語彙論、あたりが私には出来る。

まして、大学における「教養教育」を、どこかの化粧品会社の「教養講座」と混同して、あれは素人向き、女子供向き——断っておくがこれは私がいうのではない、そういうことを考えている人が使う語、である——のやさしいお話である、と考えるのはそれこそが学者らしからぬ俗見というべきであろう。

ただし遺憾ながら、その立派な大理想は今日の大学ではタテマエであるに過ぎない。そのことは、さきの「広辞苑」の「教養部」の項の一句が、はからずも、というより、簡潔明瞭にこれを伝えている。「最初の二年または一年半」と。

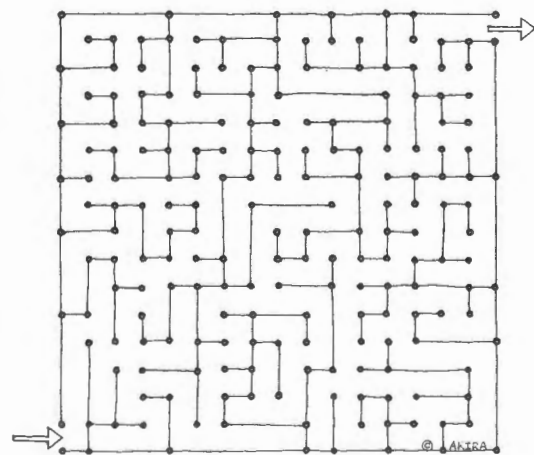
「単なる学殖・多識」ではなくて、「あらゆる個人的精神能力の統一的創造的発達を身につける」というような高邁この上もない理想が、なぜ大学の低学年の二年または一年半に、トンネルのごとく押し込められなければならないのか。それをまず修得しなければ、「専門に分化した」学問に到達できないというプレパラトリー・コースに設定されなければならないのか。大学に不思議なことは数多くあるが、これはその数ある不思議のうちの最たるものというべきだろう。

わが勤勉なるキョーヨーブの教官諸氏は、その不思議に思い悩みながら、今日も黙々として神戸大学鶴甲分校に出勤してゆく。そして、あたかもセンター街が引越してきたような廊下の人ごみの中を、右に左に体をかわしながら研究室まで辿りつく。多くは弁当持参である。家庭の事情でそれが叶わぬものは、カップヌードル、カップライスのたぐいの愛用者である。彼らは、研究室の窓からみえる「教養部解体を許すな」というタテカンの大文字を、複雑な思いで眺める。そして、オレは一たい大学のなんなのだろう、という切ない思いにひとときは沈むのである。(「展望」22号1976・3・20)(文学)

当というべきであろう。それが重々分るから、先の学生の間に私たちはむかつ腹を立てることも出来ず、ただ苦笑するほかはないのである。

一たい、そのような「キョーヨーブ」とはなんなのか。ちなみに新村出編「広辞苑」の「教養」の項をひいてみると、次のような字義が示されている。「単なる学殖・多識とは異り、一定の文化理想を体得し、それに準じてあらゆる個人的精神能力の統一的創造的発達を身につけていること」。まことに教養部教官をして奮起せしむるに足る大理想であり、もしこれがわが教養部の名に伴う体であるならば、我々は酒場の隣りの客の質問に昂然と胸を張って答えて然るべきであろう。また、学生の無邪気な問いに対しては、その途方もない無智に一喝をくらわせて当然であろう。「広辞苑」は、さらな懇切にも「教養学部」という一項を設けて、「大学の法・文・理・工などの専門に分化した学部に対し、一般的総合的な教養を主とする学部」と説明し、さらにさらに懇切にも「教養部」という項を設けて、「四年生大学で、主として一般教育を施すために専門の学部から独立して設けた組織。最初の二年または一年半」と説明している。まことに至れりつくせりというべきである。ここで「一般教育」といっているのは、前段との関連からみて、当然、「単なる学殖・多識とは異なり云々」と説明されている「教養」を意味しており、「教養」と「一般教育」とは即ち同義なのである。

この大理想に対し異議をさしはさむものは、ほとんどあり得まいと思われる。大学の教養部もまた、間違いなくこの大理想を建前として存在しているはずのものである。「教養」を「単なる学殖・多識」より下位の価値、あるいは「単なる学殖・多識」にたどりつくための「準備課程」とするような解釈はどこをついても出てくるはずがないのである。



前野 繁



昭和25年9月30日付をもって当時の文理学部英米文学科の助手として神戸大学に着任して以来、この3月31日で32年半になる。新制大学が発足して、専門課程に第1回生が進学してくる時のことであった。文理学部文科の事務室は六甲台の今の経済学部の事務室がある狭い一室で、奥には文科長の今井先生が机の前に坐っておられた。最初私は先生を事務官と誤解していた。当時の英米文学科のスタッフは池田義一郎先生と故橋忠衛先生であった。一年程して文理学部と御影分校（教養課程）が阪神御影駅の北側の新築の校舎に移った。この時研究室は言語学の井上増次郎先生と相部屋で、姫路には市電がないというので、姫路分校（教養課程）をきらって、御影分校に赴任されたと言われた寺田建比古先生がよく研究室に見え、高遠なお話を長時間拝聴したものだ。井上先生と同じく旧制高知高等学校で教鞭をとられたことがあったからである。神戸っ子である私は、2、3の国立大学から口がかかったが、神戸大学でも講師昇任の話が持上ったので、動かなかった。

昭和28年4月から姫路分校勤務となった。当時利用していた山陽電車は兵庫駅と姫路の間を走っていたが、特急で75分かかった。その頃は山陽電鉄の姫路駅の改札を出ると御幸通りで、50米道路などはなかった。土曜の午後よく歩いた姫路分校の正門から南に真っ直ぐ数百米のびる道の両側には人家はほとんどなく、田園だった。昭和33年4月から学寮の舎監も兼ねた学生委員となったので、姫路西校の近くの官舎へ引越した。その年の5月であっただろうか、深夜、というよりは早朝、2時頃寮から電話があって、寮生で酒に酔った挙句、駅前商店の看板を次々と倒して、警察に捕まり、一晚留置される所を、翌日ドイツ語の試験があるというので、釈放するから、身許引受人になって、もらい下げに警察へ行ってほしいと言う。姫路警察署へ自転車で行き、寮生4人をもらい下げ、倒した看板を元通りに立てさせて、寮へたどり着いた時には夜も明けていた。その秋、学生大会で某教官をわれわれの教官と認めないという決議を行ない、その教官の授業ボイコットする事件が発生した。

学生委員に引続き、次の2年教務委員（当時教養課程委員と称していた）となった。60年安保闘争の時のことである。街頭デモに出かけた学生たちが50米道路の「やまとやしき」というデパートの前で警官と衝突し、警棒を奪って、自治委員室に飾り、夏

休みにはいるとすぐ、警察がそれを取り返しに姫路分校に立入るといふ事件がおこった。自治委員長、副委員長等5、6名が逮捕された。秋のその裁判の日、学生大会で午後の授業放棄を決議したのだが、裁判を傍聴していた分校主事小森先生が授業があるからと言って、退出されたことで、後日ある教室で、分校主事、学生委員、教務委員は自治委員たち二十数名から糾弾を受けた。糾弾会というか団交というか、その初めではなかったろうか。学生委員長に当るのが故上西先生、学生委員に当るのが、前に学生委員長をつとめられたことのある飯盛先生。飯盛先生は警察の構内立入りの時から随分と苦勞された。

だが姫路分校時代は牧歌的な面が大いにあった。学生数が少ない上に、旧制姫路高等学校の伝統をついでいた。寮生の中には、暑くなると上は半袖シャツ一枚、寒くなると、ドテラ姿で教室に現われるものもいた。寮が校舎の横にあったせい、あるいは姫路には遊びに行く処がなかったせいばかりではないだろうが、授業は皆出席というのが多かった。特に理系のクラスは中だるみの1、2回を除いて全員出席だったし、一期15回の授業ができた。教官と学生のつき合いも密であった。官舎が学校の近くにあって、寮の総代たちを日曜の夕食に招待したり、陸上競技部の部長であったので、陸上競技部のコンパをしたり、指導生も遊びにきた。これは私に限ったことではなかった。

昭和38年に教養課程が教養部になり、39年夏姫路分校は今の教養部の処へ移転し、牧歌的な教養部はなくなった。蛸の足大学と言われた神戸大学の校舎を一箇所に集める計画の犠牲となったのである。このような路姫分校で長年教壇に立っていた先生方の中には神戸へ移ったことで、生きる張りを失われた

方が何人かおられた。私は事ある毎に路姫分校ではこうであったと言ったため、ショービニズムとか何とか非難された。昭和43年大学紛争がまだ東大の外に波及しなかった9月に渡米し、ノースウエスタン大学という、シカゴの郊外にある私立大学で研究に従事した。日本では手にはいらない書物が山とある図書館で読書三昧だったので、一年近くの間には研究は目に見えてはかどった。大学紛争については12月頃東大の安田講堂の攻防戦がシカゴでも放映された。東大では外国に留学中の教官を全員呼び戻す方針であるという記事を送ってもらった新聞で読んだが、私は無事留学を終えて、44年8月帰国。羽田に着いたのが土曜日で、月曜に教養部へ顔を出したら、封鎖解除の2日目でA棟の荒廃ぶりにわが目を疑った。その日の午後三宮のある建物内で行なわれた教授会に出席し、紛争について色々な情報を仕入れ、翌日A棟屋上のドアの前にバリケード用においてある私の貴重な図書を入れたスチールキャビネットから図書を出していると、楽し気に口笛を吹いて屋上からはいつてくる人がいる。見ると松下講師であった。

昭和44年度入学者に対する前期の講義は紛争の影響で9月に開始、本来なら後期の授業から持つところを、中川評議員担当予定のクラスを教えることになった。中川教授のピンチヒッターとも知らず、最初顔を出したクラスで、中川評議員を糾弾しようとぐすね引いて待構えていた全共闘派の学生に徹底的にいじめられ、何時の間にか私の留学は罪悪であるということになってしまっていた。のはほとんど米国に紛争中は留学していた罰に昭和46年度から教務委員長をおおせつかった。4月早々松下元講師とそのグループによる哲学の講義の妨害が始まった、そして9月に逮捕されるまで授業妨害は続いた。ある時講義室のドアの前で松下グループとやりあっていた時、一人が「お前たちは刑事か？」と言うと、「警官でなくて教官だ、君たちは授業に出ているのか？」と竹内学生委員長は切りかえされた。竹内教授は姫路分校時代には学生委員、同委員長に当る役職を歴任され、名生委員の名が高かった人である。「大阪湾の水は冷いぞ、夜は月夜とばかり思うな」と過激派に脅かされながら、竹内先生とコンビでこの紛争後の混乱期をよく切り抜けたものだと言っている。授業妨害だけでなく、血を流す内ゲバ、それに学費値上げ反対で幾度かバリケードストライキがあった。そしてそれが期末試験まで持込まれ、実施できなかった試験のうち医学部は3月に、残りは翌年度の4月から6月までの土曜日の午後実施した。2日目には「山口君の聴講を勝ちとる会」との対応があり、また医学部の条件付進学をなくしたため、何度か医学部の2年生と団交を持った。団交はこれ

だけではなかった。最も和気あいあいとしたものは留学生4名（すべてベトナム人留学生）との団交で、受入れ体制不備の件であった。この事は「国際交流センター・ニュース」に書いたもので、これ以上触れまい。教務委員長の御役御免になってからも、留学生の世話を引受けた。当時は南ベトナムの政情からそそ出身の留学生が多かった。彼らから聞いた話ではサイゴン大学の大講義室の前の座席を確保するため学生は朝6時に大学へ出かけたそうである。サイゴンが陥落して、私費留学生は親許からの送金が断られた時は困り果てた。一二の同僚の助けで松下電器を訪れたり、三洋電機に電話して援助を求めたり、関西経済同友会の専務の人と話合ったりして、彼らの学費、生活費捻出を計ったが、うまくゆかなかった。しかし窮状が新聞に出ると、一市民の人が匿名で貯めていた10万円余の金を大学本部へ届けて下さったり、当時の経営学部長の口ききで、神大出身の会社経営者の方から月々数万の奨学金を頂戴できるようになったり、新聞広告で探したアルバイトで金を稼いだりした。彼らは一人を除いては無事卒業したが、電子工学科の修士を終了した留学生は、自分の専門の知識を生かす仕事が見つからず、神戸のゾーン販売の会社に勤めたりしていた。残念ながら日本人社会は、外国人、特にアジア人に対して閉鎖的である。このことはカンボジアから来たK君も言っていた。その彼は日本人社会の閉鎖性を嫌って、アメリカで職を求めようとしている。彼の父は小学校の校長で、内乱が始まると政府軍将校となったため、全く絶望視されている。彼の母、姉妹からの音信も全くない。K君はポルポト政権によるカンボジア人虐殺を信じようとしなかった。カンボジア人はベトナム人に対し憎しみや恨みを持っているが、同国人に対して持つ筈がないと言っていた。彼は私の指導生で、学部在学中夏は毎年香住の神大海の家へのG生旅行に参加した。そしてギターをひいて、寂しさをまぎらわしていた。彼は夜よく私の横で寝た。彼の寝言を聞いたことがある。フランス語だった。昔はベトナム、カンボジア、ラオスを仏領印度支那と呼んでいた。神大生諸君よ、君の傍で講義を受けている留学生は、君が想像もしない程大きな苦悩を胸に秘めているのかも知れないのだ。

私の出番も終わった。「人の一生は要するにうろつく影だ、憐れな役者だ、自分の出る場だけ、舞台の上で威張り歩いて、わめき散し、それから後はもう聞こえない。」（シェクスピアの『マクベス』より）（英語）

三年間

— 転任の辞 —

鍛治 哲郎

三年の月日を神戸で過ごしたことになる。この土地を初めて訪れたのは三月の上旬、暖かいなかにも春らしい日だったのを覚えている。丁度その一週間ほどまえ、まだ冬の続く寒いドイツから帰って来たばかりで、この国が穏やかな気候の国だと思知らされてはいたが、六甲の山々から海に注ぐ大小幾本かの川を越え、沿線の自然に恵まれた光景を目にし阪急六甲の駅に降り立ったのち、教養部への坂道をバスに揺られて登っていったとき、明るい日さしの中でどこかまどろんだような家並みは保養地といった印象だった。それは二年半の異国での生活の中で知らず知らずのうちに蓄積していた疲労がそう思わせられたのかも知れなかったが、ともかく街は明るく和やかな表情をたたえており、幾分の気負いを持って訪れてきたよ者にとっては一方で拍子抜けな感じはしたものの心温まる歓迎であった。

しかしそれは遠来の客に見せた街の表情であり、旅行者ならともかく一旦そこに住むことになってしまうと最初の印象などは日々の生活のうちどこかへ消えてしまうものらしい。ある程度の心構えはあったが、急に学生の身から教師の立場に立たされることになり、しかも全く知らない土地と人々の間でのこと、保養地で骨を安めるなどとてもない話で、一日一日をこなして行くのがやっとなの有様だった。それに加えて夏に向かい蒸し暑くなって行く湿気が多い日本の気候は、物足りないほど涼しく快適であったドイツの夏でこそ懐しく思い出されはしたものの、やはり久しぶりということもありなんとも耐え難いものであった。夏休み前の授業が終わった時には学生時代にはついぞ味わったことのないような独特の感慨があった。

夏が過ぎ秋が来るともうこれで一段落ついたと思った。週末など奈良や京都にでも足を伸ばそうなどという考えも頭をもたげる余裕もできていた。それがどうしたことか何かのはずみに腰をひねってしまい、少し大袈裟な言い方をすれば起居も不自由なまま冬を迎えてしまった。しかしこの腰痛はショックだった。朝起きたとき腰が曲がらないなどという不様な目に合うなど想像さえつかないことだった。この時以後、阪急六甲から教養部まで学生にまじって歩いて登っていたのをバスに切り換えてしまった。そしてどうやらこの腰痛が新しい生活に馴染むための最後の通過儀礼だったらしく、それ以後、自分の専門の仕事に別れをすれば記憶に強く残っていること



の数は徐々に少なくなって行く。時は比較的スムーズに流れ始めた。そういう中で二年目に担当することになった二課程の授業のことは、夜の校舎にそこだけ明るく燈が輝やいている教室のように振り返ると心に鮮明に浮かんでくる。殊に冬場は人数も少ない教室で六甲おろしに振える窓ガラスの音に抗しながら学生教師ともどもストーブの近くに寄り集まったの授業だった。今年、組合の仕事で夕食を六甲台の食堂でとることがあるが、そういう折、当時の学生と一寸した挨拶を交わすのは心穏やかでときであるとともに、去ることが決まった身には申し訳ないような思いもこみあげてくる。

神戸を去る話もち上がったのは去年の夏前のことで、何かの用で神戸から出て戻ってくると我が家に帰りついたと安堵し、街が自分の衣服のように身に合い出したと思われ始めた矢先のことであった。しかし一旦去るということになると街はまた少しずつ退いて行く。そして近付いてくる三度目の春にもこの土地はまた最初に訪れたあの時のような表情を浮かべるのであろうか。初めての職に就き全く知らない土地で過ごした三年間だった。そういうことがなければ而立を過ぎた者にはただ速く過ぎ去るだけの短い年月だったであろう。そう思うと随分贅沢な三年間だったと思う。勿論、私にとっては贅沢な日々だったが、快く迎えて下さった方々には慣らすことに骨の折れるだけの日々で、迷惑ばかりをかけて去ることになってしまった。もしかすると身勝手ができる最後の時だったのではないかと言いつつもならない言いつ事を考えながら春めいてくる六甲の山々や街を相済まないような思いを懐いてながめている。

(独語)

自己紹介

— 新任教官紹介 —

原 克



新任教官の責とやらで、自分を紹介しなさいとのこと。これは仲々、術のいることだわいと内心恐れています。と申しますのも、自分以外の余人を紹介し仲介するのと異なり、自分を紹介するってのはどどのつまりは、自分の姿を相手の面前に曝してゆくことを旨とするのではないからでしょう。そうではなくて、自分を相手に増々わかりにくくさせる。自分でこれこそと信じておるものを増々相手の目につきにくくする。そこにこそ自分を紹介するって行為の隠されたねらいがあるように思われるからです。それは、言ってみれば自分のまわりに一種の煙幕を張りめぐらすことでもあるのでしょうか。ですから、要は見事な煙幕が張れるかどうか。一目で見破られてしまわないような、奥ゆきのある、それでいてしっとりとした煙幕が張れるかどうか。そこが、およそ苦心のしどころでもあり、腐心の要でもあるのでしょうか。

要は、これらがおおよそ技の問題であり、技術の問題であるとうことです。そこでは、確かに奥ゆきを感じさせるイルジョニスティクが発揮させられますが、それは文字通りの幻想過程に過ぎないのでしょ。すべてが、印象・知覚に還元され——つまり常に受動的なわけにして、してもう一步踏み出してその奥ゆきの尽きる果て、まさにその奥には何かあるのかつてのをのぞいてやろうとゆう好奇心にまではゆきつかないのでしょうか。

正直申しますと、この奥ゆきとか、あらゆる種類の「向こう側」(Jenseits)とか——一般に直接目には見えなくてそれでいてこう全然無縁でもない分だけ、手に触れてはみたいけどなぜかそれはばかられるようななものか——こういったものは、僕、苦手なのです。そこはかたなく漂よう神秘的香り、ぼんやりと取り巻くアウラの層、そういった思わせぶりは、苦手なのです。これらが共同幻想の領域に來臨されると、「なにやら教」として打ち立てられ、一方、個人幻想の領域に据えられると近代的「自我」、人格として結晶化してくるのかもしれない。

僕が少しばかりかじってきた、フランクフルト学周辺の一人、ヴァルター・ベンヤミンの言をかりれば、「くたばれアウラ！」といったところでしょうか。唐突に大声をはり上げてしまいました。

前々から不思議に思っていることがあります。昨年10月に神戸に来るまで東京にいました。そこで、何人かのゲルマニストに会ったり、酒飲んだり、い

ろいろと、まあ騒いだりしたものでした。そんな時、同世代の者ですと、大抵、音楽が一度は話題にのぼるのです。その事自体で既に、互いの話題の乏しさを暴露してしまってるわけですけど、更に驚ろいたことに、皆さん口をそろえて語り出すのが、ワーグナーとかモーツァルトとか……そういった、とても偉い人たちがっかりなんです。そんなのを聞くと、ほんのりイイ気分カウンターに寄りかかっていた僕なんぞは、なにか急に気恥かしくなってしまう、ツツと背ずきをのぼしてしまうのでしたし、それだけならまだしもなのですが、始末の悪いことに、さきほどまで傍にしんなりと寄りそって来てくれた僕の酔いまでもスッと席を立って行ってしまったものなのです。東京は面白い街でしたし、幾人かお会いしたマニスト諸氏も随分とイイ人でした。だけれども、彼らの間にハシカ並みに慢延しているこの「独文学者クラシック・トレードマーク熱」は実際なんとかならんもんでしょか。なぜなら、音として聞く限りでは、凡百のクラシック「音」よりも、ずっと生きてもおり、しっかりと近いところに足を踏んばってもおり、それでいてずっと遠いところまで翼を伸ばしてもいる音は随分とあるのに。

最近では、こんな連中が出している音に説き伏せられているところ。グレース・ジョーンズ+坂田明。リップ・リッグ・アンド・パニック+ドン・チェリー。山下洋輔、めんたんびんの'80、10月コロムビア・スタジオで収録した「ブギ・トゥ・ユー (Boogie to you)」, それに忘れてはならない佐々木忠平の声の塊。

一体、神戸では音の嵐はどんなものであろうかと期待し、心はずませております。興味ある方は、是非御一報下さい。(独語)

サイバネティクスと体育

河 辺 章 子



毎朝、バスを降りて陸橋を渡る時、必ず一度は海の方へ視線を向ける。なぜなら、海面が朝日を反射して、まるで銀盤のように輝く日があるからだ。その光は思わず目を細めてしまうほどにまぶしく、鋭い。そんな日はちょっと嬉しいような、何とも言えないさわやかな気分になり、D棟への足どりも軽い。大阪生まれの大阪育ちである私には、日常生活の中で海を眺めることなど全く有り得ないことだったし、大学もまた、青垣こもれる古都、奈良にあったので、学部、大学院と9年近くの間は山を眺めての日々だった。

奈女大では文学部の中に体育学専攻があり、文学部で唯一の実験系講座である身体運動学講座に籍をあいた。実験準備室には大工道具をはじめ、電気・電子部品がずらりと並び、いったい何屋を始めるのかといった様子だった。いざ実験計画が決まると、薄汚れた白衣に身を包み、右手にのこぎり、左手にはカナズチという出立で実験装置作りが始まる。こうして一から実験に取り組めたことが、研究の道へ進む契機のひとつになったのかもしれない。

身体運動学を勉強するようになってから、人間の運動の素晴らしさに気付くようになった。人はほとんど無意識に、いとも簡単に歩く、しかし、歩行動作は脚の筋活動だけでできるような単純なものではない。その証拠に、人間と全く同じように歩けるロボットはまだ開発されていない。しかも、人間は歩くだけでなく、走り、跳ぶ。ましてスポーツにおける身体運動はもっと複雑で高度だ。例をあげると、バスケットボールでは、高さ3m、直径45cmのリングに直径24cmのボールを敵の防御をはずしながら入れるという困難な作業を行わねばならない。野球やテニスでは、時速100km前後の速度で飛んでくるボールを直径約6cmのバットやラケットで自分の思った方向に打ち返す。器械体操、フィギュアスケート…etc. 神技とも思える動作が各種スポーツに見られる。いずれも、初めは至難の技だが、練習によってその技を獲得することができる。しかし、同じ練習をしてもすぐに上手になる人、なかなか上手にならない人というように必ず個人差が出てくる。

一般に、スポーツや何か体を使って行う作業に優れた人を評して「運動神経がいい」と言う。「運動神経がいい」という表現の中には、「器用だ」、「カンが良い」、「のみこみが早い」といった様々な意味が含まれている。しかしながら、「運動神経」とい

うのは、正しくは神経系を構成する末梢神経の一種で、その性質は人間ならば誰でも同じである。一般に言われるような運動の上手、下手を決めるような大それた能力は持っていない。正確に言うと、運動の上手・下手は「運動神経」で決まるのではなく、運動神経に達する脳からの指令によって決まる。

また、「スポーツは体で覚えるものだ」とよく言われる。これも運動神経の場合と同様、体の筋肉や腱がその運動を覚えるわけではなく、すべて脳で処理され、記憶されている。このように人間の運動はすべて、脳・脊髄など神経系の働きによって引き起こされ、コントロールされている。

このような観点から、私自身としては、サイバネティクス（通信制御理論を生物の運動制御機構にまで敷衍したもの）的な立場に立って、人間の運動の巧拙をきめる要因を、主として神経的調節機能の面から見ていきたいと考えている。

ことわざに「下手の横好き」と「好きこそ物の上手なれ」というのがある。この二つは全く相反する意味を持っているが、私流の解釈では、これらは学習（練習）という課程を経ることによって互いに近付くことができると考えている。例えば、ある人が生まれて初めてテニスをしたとしよう。ラケットを振ってもボールに当たらない。当たっても思った方向へ飛んでいかない。しかし、何かが面白いとその人が感じたとする。面白いからテニスが好きになる。始めは「下手の横好き」と噂されるだろう。でも好きだからラケットを握る機会が増える、練習をする。当然腕前は上がる。よりいっそう好きになって上手になる（もちろん、ボルグやマッケンローのような技を身につけるのはかなり困難だろうが）。そこで人が見れば、「好きこそ物の上手なれ」という訳で

ある。つまり、下手であっても好きになることが上達する第一ステップであると言える。

世間では、運動嫌いの人が少なくない。なぜ運動嫌いかという、自分は下手だから、運動神経が悪いからと理由づける。先にも述べた通り、運動神経に良い、悪いの差などないし、まして始めから上手な人は誰もいない。誰でもみんな、下手から始めた

ということを頭に置いて、是非、下手の横好きになってもらいたいと思う。（もし、いつまでたっても下手の横好きのままであるならば、それは努力が足りないか、練習の仕方が間違っているかのどちらかだ。）運動することを好きになる手助けをすることも、体育教師としての大事な役割りのひとつであると考えている。（保健体育）

私は神大卒業生

原 俊 雄



昭和44年、全国的規模に広がった大学紛争は頂点に達し、東京大学では安田講堂攻防戦が繰り広げられた年の4月、私は晴れて神戸大学に入学いたしました。入学試験すら大学のキャンパスで行うことのできなかった頃のことですから、学外で催されるはずであった入学式は、案の定、当日になって中止となり、入学式の経験のない大学生となった次第です。その上、半年間ほど自宅待機となり、大学を3年半で卒業した貴重な経験を持つことになりました。

大学のキャンパスは、全共闘の学生に占拠封鎖されてはいましたが、幸い学生であった私は、封鎖内に入ることができました。そこで、自宅待機中も毎日大学に出かけ、新入生と連絡を取り合って集まり、全共闘の学生と何回も議論を戦わせたことを覚えています。理想と現実の差の大きいことに驚いたのもこの頃ですが、人間にとって本当に理想とするものは何か、を真剣に考えたものです。講義再開後も紛争は続き、講義は全共闘とその支持者達により討論会に変えられ、講義続行支持であった私は、彼らと正面から対決したことが、何回かありました。

以上のごとく、私の大学生活は、私自身の精神的にも、環境的にも、紛糾の中から始まりました。とは言っても、生来の楽道家(?)である私は、未確認飛行物体を取り扱った論説を教材にした、前野先生の英語の講義のレポートの中で、「UFO is USO (ウソ)」と結論づけたり、課題の似かよった社会学と哲学のレポートに、全く同じものを提出して、両方とも合格したように、教養部生活を適当に楽しみました。現在百余人の会員を擁するバドミントン同好会は、学生生活をより楽しく充実させる為に、2年生の時に、友人と共に創ったものです。

神大の大学院修士課程修了後、大阪市立大学の後期博士課程に進みました。私の所属した市大の研究室は、神大の研究室と協同研究を行っていましたので、市大在学中も、しばしば神大に来ていました。

そして市大在学中に、日米科学協力事業としての高エネルギー物理学実験に携わり、9ヶ月間、カナダとアメリカで生活しました。この時ほど、自分の語学力の無さを痛恨させられたことはありません。私は、高校以来英語が苦手で、英語なんて学問ではない、と勝手に納得していたのですが、英語を話さなければ何一つ仕事ができない国（もっとも、カナダは仏語でも通じる）での生活は、私が心の奥底に押し込めておいた劣等感が頭を持ち上げ、初めは失意の日々でした。しかし、カナダ、アメリカの良き友人に恵まれたこともあり、立派に仕事を為し遂げたと、今では自画自賛しています。

現在、私が行っている研究は、大阪市大の頃から継続して行っている新粒子の寿命の測定実験です。物質を構成している基本粒子は、クォークと呼ばれていますが、その4番目のクォークで構成されている新粒子（チャーム粒子）の寿命その他の性質を調べています。この研究は、日本、アメリカ、カナダ、韓国の4ヶ国の共同で行っていますが、アメリカのフェルミ研究所の巨大加速器を用いて、チャーム粒子を生成させ、原子核乾板と電氣的検出器を使って、その崩壊を調べる実験です。私達日本グループは、原子核乾板の製作、実験、解析を担当し、現在、理

学部と教養部において、解析を行っています。新粒子の飛跡を実際に御覧になりたい方は、一度御越し下さい。

以上が、私の神戸入学以来の略歴ですが、ある先生が私に「その大学を卒業した教官は、責任が重い。」と仰ったことが、印象に残っています。東京大学のように、卒業生で教官の大半を占めている大学とは違って、神戸大学の場合、様々な大学の出身者で教官を構成しています。その中で、学生として神戸大学の教育と研究を見て来た教官は、多くは居ないでしょう。そこで私は、大学紛争以来の神戸大学を、学生として見て来た経験を生かして、教育を大切にしていきたいと思っています。そして、神戸大学で受けた教育をもとにして、研究にがんばってこ

と思っています。

最後に、この紙面をお借りして、教養部教職員のバドミントン同好会への勧誘をさせていただきます。この会は以前から活動して来ていたのですが、この度再編成して、私がコーチ役を行っています。月曜日から金曜日までの昼の休憩時に、第二体育館で活動しています。使い古された諺ではありますが、健全なる精神は健全なる身体に宿る、と言われてます。週一回でも運動することは、精神的にも、肉体的にも良いことは言うまでもありません。バドミントンは、本格的に行えば、大変激しいスポーツですが、気軽にできるスポーツです。老若男女は問わず、都合の良い日に、気軽に御参加下さい。そして、自分に合う程度に体を動かしましょう。(物理学)

GRADE CONSCIOUSNESS

Yutaka Yamamoto



It was suggested that I write a short commentary comparing Japanese with American university students. Given my limited experience with the former, however, I doubt whether I could make any definitive statements without committing the fallacy of "hasty generalization". Thus, I will simply comment on one prevalent attitude among university students in America--viz., their attitude toward grades. A reader may draw her own comparisons if so moved.

American students are "grade conscious" to a fault. They pursue high grades with a vengeance. Sometimes they do so in the respectable manner--i.e., through hard work and serious study; often, however, they do so by relentlessly challenging the professor's assessment of their performance or by persisting in a cloying argumentum ad misericordium--i.e., through a desperate appeal for pity and sympathy. The reasons underlying this acute grade consciousness are, undoubtedly, diverse. For some, it may be a matter of pride or competitive spirit; but for most, I think that it is a matter of one of two concerns: (1) survival; and (2) post-undergraduate education. I shall comment on each in turn.

1. Survival. Consider a student in her second semester Junior year. Call her Grace. Thus far, Grace has been doing average work. That is, her grade point average (GPA) is 2.0 on a scale of 1 to 4. It is now well past midsemester and, of the five courses in which she is currently enrolled, it is clear that she will receive an average grade in three and fail a fourth. Now it is a matter of survival for her to receive an A in the fifth course (say, a course of mine in philosophy): if she receives any grade less than an A, she will be dropped out of the university. Grace may be well advised to forego the Friday night beerbusts, take out her philosophy books, and burn the midnight oil. But, of course, if her performance to date was below par, this may not be a live option. At this point, if Grace were an atypical student, she would live up to her name and gracefully accept her fate. On the other hand, if she were a typical student, she would either (i) try to convince me that my grading standards are unreasonable or that my assessment of her work is in some way distorted; or (ii) appeal to my sense of pity and beg for a reassessment of her work or for permission to withdraw from the course without penalty. It is not likely that Grace will succeed in either case.

2. Post-undergraduate education. For many students, a Bachelor's degree is not the end of the academic track. Students think in terms of going on into post-undergraduate education--for example, to a graduate school in their major area of study or to some professional school such as law or medicine. (Of course, these students are not the bare survivors like Grace in the case discussed above.) Some plan to go on to do graduate work immediately upon completing their undergraduate studies; many, however, think in terms of opening up an option to go in the future should they decide to do so. In either case, given the highly competitive nature of graduate school admissions, it is essential for the student to complete her undergraduate studies with a high GPA.

A final note. In my opinion, there is some connection between this grade consciousness and the recent phenomenon known as "grade inflation" in higher education. Throughout the country, the GPA has been on the rise. In the past decade or so, the average grade assigned has moved from a middle C to a solid B. One logically possible but highly improbable explanation is that the students are simply getting smarter. A more likely, albeit partial, explanation is intimidation. What I mean is this. Toward the end of each course, students submit anonymous evaluations of their instructors. These evaluations carry some weight when the instructor is being considered for promotion and/or an annual merit increase in salary. One study showed that students who had a low course grade average at the time of the evaluation consistently submitted low evaluations of the instructor. In short, there was a high correlation between bad grades and bad evaluations. (One should not find this to be very surprising.) Given this correlation and the use of these evaluations in considerations of promotion and salary, one can readily understand that an instructor (especially a junior) may be strongly tempted to assign higher grades. And I would not be very surprised if many instructors succumbed to this temptation.

If anyone is wondering about the use of the feminine pronoun, I use it only to avoid the wrath of radical feminists. They have moved many writers to use the "his/her" construction; but I find that construction to be not only awkward but annoying. My compromise is simply to use feminine pronouns to match the indefinite.

教養部教官の研究内容紹介

教養部は百五十名余りの教官がそれぞれの専門を深く究めつつその知とあるべき生との連関について常に思索をめぐらせているところである。このたび広報委員会では全教官に各自の専門分野についてご紹介下さるようお願いしたが、原稿を頂けたものについて以下に掲載する。この中に興味を覚えるテーマ、深く学びたい分野が見つければ一度研究室の扉を叩いてみることをお勧めする。

歴史学

桂 圭男

昨年11月末、誠文堂新光社より『パリ・コミュニケーションの老人と若者と』と題する新著を出版した。これはジャコバンの革命家の老ドレクリューズと正規軍士官から革命側に加担した青年ロセルという二人の対照的なコミュニケーション指導者の出会いと交流を通じてコミュニケーションの現代的意味を問い直そうとする意図から書かれたものである。

私は岩波新書『パリ・コミュニケーション』（1971年）でコミュニケーションの通史を書き、教育社歴史新書『パリ・コミュニケーション—パリが燃えた70日』（1981年）で第一インターナショナルを中心とする組織の問題を取り上げた。今度は生の人間個人を描きたいという気持を前から持っていた。これが誠文堂新光社の依頼に直ちにに応じた動機である。次は研究史を主体とする学術論文集の出版を構想している。それまでコミュニケーションについて自由に書ける時代が続いていることを念じながら。

安井 三吉

抗日民族統一戦線の形成とその展開、解放区建設の具体像、新民主主義革命の理論の形成過程などを中心とした日中戦争の研究が当面の課題。その他、中国近代史における少数民族の問題、孫子と神戸にまつわるコマゴマとしたことにも関心を抱いている。

須崎 慎一

日本の近・現代史。とくに、大正・昭和戦前期の政治史・民衆史。この時期の史料は、江戸時代以前の史料にくらべて格段と粗略にあつかわれがちであり、かつ情報公開も全く不十分である。しかも私が見たいような史料が刊行されるとべらぼうな値段がついている。そうした<悲観>的状况のなかで、各地を歩き、中央・地方の行政文書や、旧家などにある文書（日記などを含めて）をみながら、現在、日本の近・現代史を自分なりに再構成しようという課

題に取り組んでいる。皆さんの家や知りあいのお宅に、おじいさんなどの日記や史料などがあれば、是非教えていただきたい。

哲学・倫理学・芸術学

田口 寛治

「人間とは、どのようなものか」を哲学的にとらえようとする哲学的人間学。とくに人間を、宗教との関連で考えてみたい。その宗教も、「宗教一般」というような抽象的なものではなく、ユダヤ教、キリスト教、イスラム、仏教など、現実の世界宗教と、その信仰のもとで生きる人たちの精神生活はもとより、政治的、経済的、さらには日常的な生活との関連において、「人間」というものを究明してみたい。これまで専攻としてきた西洋哲学史をも、以上のような観点から、もう一度、根本的に考えなおしたいと思っています。

山本 道雄

最近はこの3のテーマに関心が集中している。

- (1) 現代論理学および科学哲学
- (2) カント哲学およびドイツ観念論（とくにヘーゲル）
- (3) 比較思想史

宗像 憲

西洋近世の哲学の歴史を手懸りとしながら、広い意味での合理主義を問題としている。これまでに主として検討してきたのは、狭い意味での所謂十七世紀大陸合理論、デカルト、スピノザ、ライプニッツの思想であるが、これに対立させられる、ほぼ同時代から十八世紀にかけてのイギリス経験論の思想の流れ、特にそのひとつの到達点であるヒュームの懐疑論にも関心を寄せている。古典的合理主義の依拠した神の人間知性に対する、この自然主義的観点からのヒュームの批判の先に、現代に問われる合理性は存すると思われるからである。

水野 和久

ヨーロッパの近代哲学とくに現象学の研究。それに基づく人間科学基礎論の構築。この研究の顕著な方法として考えられるものは次の通りである。第一に、ヨーロッパの近代哲学が、知識の論理的かつ因果的客観性を基礎づけるための哲学的原理を人間の主観性のなかに求めたことと、近代的自由の根拠を人間の自然的本性のなかに求めたことにたいして、批判的に反省することである。第二に、この反省は、1938年に没した哲学者フッサールの創設した現象学的方法によってどこまで徹底せしめられたかを、現代哲学の課題という視点から分析することである。そこから明らかになる哲学的傾向の一つは、現象学的方法は、その徹底化を通じて解釈学的方向へ乗りこえられる必然性を含んでいるということである。解釈は、言語表現と人間存在との関係のなかで成立する人間の基礎的現象である。したがって、人間科学の基礎を築くためには、まず解釈現象を言語的側面から解明する必要がある。表現の現象学に現代哲学の導きの糸を見出そうと試みているゆえである。

倉沢 行洋

私の研究の過去、現在、将来—私の研究者としての出発はニーチェからでした。京大哲学科の宗教学講座で、西谷啓治、武内義範両先生の指導を受けながら、卒業論文ではニーチェの「権力への意志」「背後世界」の思想と取組み、修士論文ではニーチェの「永劫回帰」について考えました。博士課程に入ってからにはショーペンハウエルの宗教論と芸術論を研究しました。ニーチェやショーペンハウエルを研究するのと並行して、久松真一先生の薫陶のもとに禅と禅芸術に関心を寄せ、実際に禅と茶道の修行もしました。大学院時代にはまた、久松先生の紹介で神戸大学の小林太市郎先生の知遇を得、芸術の理解の仕方や芸術研究の方法について、強い影響を受けました。やがて先生は、私を神戸大学へ招いて下さいました。

神戸大学へ来てからは、引続きニーチェやショーペンハウエルを研究し、また新たにゴヤの研究に手を染めたりもしていますが、いちばん力を注いだのは、日本の、特に中世から近世にかけての芸術を、思想と表現の両面から研究することでした。その成果の一つとして、このほど『対極 桃山の美』という著書を刊行しました。『芸道の哲学—日本の芸術思想研究』という本も近く出す予定です。

これからも、日本の芸術を、思想と表現の両面から研究することを軸としながら、和・漢・洋、古・今にわたる広い視野と関心を持ち続けて行きたいと思っています。

文学

山崎 馨

私の専門分野は上代文学および上代語学ですが、近代歌人の会津八一にも関心を持っています。昨年1月～12月に活字になった拙稿を列記します。

- 『古代和歌』ほか数項目～『国文学研究書目解題』（東京大学出版会）
- 『長意吉麻呂』ほか数項目～『万葉集歌人事典』（雄山閣）
- 萬葉の柳～「甲南国文」29号（甲南女子大学）
- 飛鳥紀行～「国文学」4月号（学燈社）
- 「かはづ」ほか数項目～『万葉の歌ことば辞典』（有斐閣）
- 越智野と二上山～「明日香風」2号（飛鳥保存財団）
- 八釣の里～「明日香風」3号（同上）
- 竹田の庄～「明日香風」4号（同上）
- 雲梯と畝傍～「明日香風」5号（同上）
- 会津八一の歌碑（5）から（11）まで～「奈良県観光」302号、304号、307号、308号、309号、310号、313号。

一海 知義

放翁詩万首 一首値千金

量が質に転化する、ということばがある。詩人の場合も、多作が度をすぎると、その作品群は一定の質的变化をとげる。正負両面での転化がある。中国宋代に珠玉の詩作品をのこした陸游（放翁）は、そういう詩人の一人だ。現存する詩一万首。

階級的矛盾と民族的矛盾のもとで、抗いながら生きたこの詩人の全作品を、私は20年前にひと通りかけ足で読みおえた。そして一昨年来、河上肇『陸放翁鑑賞』（岩波書店）の校注の仕事为契机として、こんどはゆっくりと読みなおしている。

読みながら質的転化の秘密と成果を探りたいのだが、それを書くために読むのは、やめたいと思う。しばらくは、ただ読んでいたい。そしてそれが終わったら、私の本来の仕事、最も寡作な詩人の一人陶淵明の研究に、もどれることを、楽しみにしている。

堀 信夫

専門は俳諧文学、特に芭蕉および蕉門の連衆の研究が中心。従来の芭蕉を基準にして他の俳諧師や俳諧文学を評価する研究態度には批判的。そんな偶像化された芭蕉を相対化し、一人の俳諧師として文学史の中に正しく位置づけることが必要であると考えている。また、俳諧は滑稽であるという原点に立ちもどって、俳諧研究の四大支柱として「滑稽・道化

師]「狂者・風狂精神」「数奇・季題意識と歌枕観」「遊び・反俗性」をとりあげ、俳諧史の再編成と芭蕉像の変革に取り組んでいる。特に最近では近世初期における江戸儒林の文学作品や、大名・旗本達の文化活動が、芭蕉の風狂精神・文化意識と密接な関係にあったことを論証すべく、江戸初期文壇の研究に専心している。

法学・政治学

竹中 勲

研究課題『基本的人権の憲法的保障とその限界に関する個別・具体的検討』

個別的研究諸課題を以下に例示する。

〔I〕日本国憲法13条の個人主義原理ないし個人の尊厳原理（この根底には立憲主義原理が存在する）の観点から、日本国憲法の人権保障諸規定を体系的に把握すること。主に、(i)自由権の内在的制約(または外在的制約)の正当化事由を究明し、(ii)自由権(消極的権利)と社会権(積極的権利)との関係について分析すること。

〔II〕いわゆる行政国家とも称せられるに至っている現代国家における行政の現実(我々の生活のほとんどすべての分野にみられる行政的介入の現実)についての認識を前提として、(i)いれば公的領域(公権力による介入の正当化根拠が肯認される分野)と私的領域(公権力の介入が正当化されず、諸個人の自律に委ねられるべき分野)との識別の現代的意味を検討すること、および、(ii)「人権保障規定に照らした、行政権の法的コントロールの理論を創造すること。

〔III〕最後に、〔I〕、〔II〕の基礎をなすものとして、日本人の法的思考様式の特質、法・規範・人権に対する考え方の特質について検討すること。なお『社会科前特講』では、個別的主题〔ex.「環境権」,「平等権」,「教育に関する諸権利」,「司法権」等〕について、特にⅢの観点からの検当が行なわれる。

中村 五郎

本学では政治学(教養部)、行政学(法学部)、自治体論(文化学研究科)の講義を行なっているので、政治、行政の広範な諸問題に関心はあるが、目下研究は現代国家の官僚制の問題に限られている。

現代国家は、行政機能の拡大と専門技術化のために、おのずから中央集権化の傾向にあるが、その場合、立法部対行政部および中央政府対地方政府の関係における変化が重要な観点となる。したがって、当而の研究焦点は、現代民主主義国家における政治と行政の関係、ならびに中央と地方の関係にあると

いえる。

経済学

向井 利昌

「経済と社会との関係の理論的分析」この一見平凡にして多難なテーマを、わたしは学生時代より追求しつづけてきている。「一筋の途」とオーバーなことをいう気持はないが、未熟で無力なわたしにとっては、永遠に未完成のライフ・ワークといえよう。わたしの主要な研究領域は、現代の変質的發展傾向にある資本主義経済と新しい変容状態にある階級関係との関連性の考察であり、とくに1970年代以後動揺と混乱の状態にあり、従来の伝統的経済理論では説明が困難なさまざまな異常現象(たとえば、不況期の物価高であるstagflation)を出現させている「不確実性の時代」の経済現象のあり方を、国家の政策と結びついている階級的勢力の考察に関連づけて解明することをこころみている。

拙著『現代資本主義と階級』(経済社会学叢書2,昭和52年,新評論)を刊してから、それについての再検討と補充の仕事をつづけているが、二年位前から、みずからの視野を拡大する一助として、文化人類学と生態学(エコロジー)の研究に関心をもってゐる。まさに、究理の途は遠くけわしいが、微力の身に鞭打って、たどたどしい歩みをつづけるほかはなく、それがわたしに課せられた宿命的課題かも知れない。

ひたすらにわれふみ越えん髪白く

なれど真理の峯仰ぎつつ

戸上 一

ここ10数年間、研究しているのは「イングランド初期の貨幣史」である。少し説明すると、まず、イングランド初期というのは、イギリス史でいうところのアングロ・サクソン時代、すなわち、アングル族、サクソン族などゲルマン人諸部族がローマ領ブリタニアへ侵入してきた5世紀頃から、1066年のノルマン征服にいたるまでの約600年間をさす。したがって、この時代、イングランドで、いかなる種類の貨幣が製造され、どの範囲に流通し、どのような働きを、当該社会・経済のなかで果していたのか、確かめる作業をつづけているわけである。ただし、この時代の貨幣史を研究するためには、利用可能な記述的史料がきわめて乏しく、古銭学の成果を活用する以外に問題を解明する手立てがない。そのため、経済史(貨幣史)と古銭学との二足の草鞋を履きつづけている始末である。もっとも、以上の事柄は、教養部や学部段階での授業内容とは一切関係がない。

夏目 隆

近代経済学をpositive analysisとnormative analysisとに分類した場合、後者の規範性を「厚生乃至福祉 Welfareの増大」という観点から規定したのが厚生経済学にはかならない。その内容は、大別して、最適条件論、最適化メカニズム論、厚生基準論となるが、私の現在の研究課題をあげれば、(1)最適条件の動学化、(2)最適化メカニズムとしての経済機構(特に価格システム)への政治機構の統合、(3)厚生判断の基準における成果基準(効率基準と公正基準)に対する過程基準の関係、を明らかにするということになる。

社会学

大野 道邦

継続的な研究テーマは、フランス社会学説の内在的・理論的展開を、「シンボルの構造と機能」という問題の文脈で辿ってゆくことである。社会学の領域ではシンボルの問題はつぎの諸点を中心として扱われてきたと思われる。(1)直接的な環境ともっぱら固定的に直結する動物レベルのシグナルとは異なり、シンボルは「ここ」や「いま」を越えた一般的な「意味世界」を表象するコミュニケーションのメディアであり、それゆえ固有に人間的なものである。(2)「意味世界」は自然的な所与ではなく、社会的約束事、すなわち社会制度として成立し、社会成員は制度化された意味システムの「拘束」のもとでコミュニケーション活動をなす。(3)制度的意味システムは、ユニークな個人の一회起的な創造であるというよりも、無数の人々による持続的な集会的生産の結果である。

以上のような、シンボルの「人間性」、「制度性」、「集合性」の諸特性こそ、A. コント、É. デュルケム、C. レヴィ=ストロースを典型とするフランス社会学の伝統の中で、重点的に追究されてきた問題であると、考えられる。

上の継続的テーマの一環として、現在の課題は、動物性から人間性への連続的展開の中にシンボルないし人為的記号を位置づけようとするコントの試みを明らかにすることである。なお、こういったコントの進化論的記号理論は「人間精神の歴史的展開」というかれの壮大な社会学的主题の一部である。したがって、「人間精神の無意識的構造」を記号学的に分析しようとするレヴィ=ストロースの試みとコントの試みを比較検討することも今後の課題となってくるだろう。

地理学

田中 真吾 氷期の地形とその形成作用

現在から170~1万年前の第四紀という時代には、地球の表面は幾たびか寒冷な気候下にあった。すなわち、氷期である。氷期には、植物や動物はもちろん土地の形態——地形も大きな影響をうけた。日本では北海道や中部地方の高山の氷河地形がもっぱら研究されたが、本州の低地、とくに西南日本には氷期の諸作用による地形はないものとされていた。

しかし、この定説はくつがえされるだろう。例えば兵庫県南半から西の、ある種の岩石地域には、山麓に緩斜面がよく発達している。これらはペディメント(岩石床)といわれ、古い、何時かある時期、暑く乾燥した気候下での侵蝕作用によるものとされていた。しかし、これらの斜面が氷期における岩石の凍結破砕にもとづく岩屑の推積によるものであることを目下、実証しつつある。そのほか、中国地方や兵庫県下の700~1000 m級の頂部にある平坦地—隆起準平原(六甲山頂もその一つ)でやはり寒冷な気候下で形成される岩塊流(Blockstrom)や岩海(Felsenmeer)を見出し、調査している。いずれにしろ、氷期の地形形成作用が広く西南日本の低地にすら及んでいたこと、さらにその絶対年代、その形成条件や形成機構の解明にとりくんでいる。

英語

松田 実矩

英国17世紀の詩人ジョン・ミルトン(John Milton)について研究しています。ミルトンの生きていた時代は、はなやかなエリザベス朝の文化からクロンウェルに代表されるような秋霜烈日のピューリタン革命へと移り、更に1660年の王政復古を迎えた時代です。主としてミルトンの青年期の詩作品や、又アダム・イーヴの墮落を扱った晩年の「失樂園」(Paradise Lost)、キリストによる「樂園」回復をうたった「復樂園」(Paradise Regained)といった叙事詩や、又「闘技者サムソン」(Samson Agonistes)といった作品を研究しています。又ミルトンはクロンウェルの共和政府のラテン語秘書官でもあったのでクロンウェルの政府の正当性をラテン語でヨーロッパ諸国に訴えています。何しろ英国ではシェイクスピアに次ぐ大詩人であり、又ラテン語でも多くの詩や散文を書いているのでラテン語も勉強しなければならず、今迄かなりミルトンに関する論文も書き、研究してきたつもりですが、いくら時間があっても足らず、日暮れて道遠しといった嘆きの毎日です。又一時代前のエリザベス朝の詩人で「妖精の女王」(The Faerie Queene)をかいたエドモンド・スペンサー(Edmund Spenser)や更に時代をさかのぼって「キャンタベリー物語」(The Canterbury Tales)を書いた14世紀のジェフリー・チョー

サー(Geoffrey Chaucer)を研究した時期もありましたが、最近、もっぱら上述のミルトンの研究に忙殺されています。

千葉 兼太郎

巨視的にいえば、米文学の小説の展開の中に、アメリカ型の「Naturalism」と、これもまたアメリカ型の「Romance」との相克を、歴史的にとらえてみたいということ。

作家単位でいえば、E. Hemingway とのつき合いが最も長い。現時点では、この作家にとっての「実存の無」(Nada)の多角的な意味に重点を置いて再吟味している。

森 晴秀

研究内容： 英語史、中世英語、文体論、英語小説構造論、イギリス・アメリカ小説史、比較文学、比較文化論。

関心をもつ分野：日本の武道、茶華道、書道、日本古代史、日本文学、絵画、古美術品、造園、建築など。即ち“Jack of all trades and masters of none.”

風呂本 武敏

小生の関心は大きく言って二つ。一つはAuden Groupと呼ばれる一九三〇年代の英国文学者の群れ。他の一つはアイルランドのW. B. Yeats を中心としたAnglo- Irish 文学。前者は英米のModern Poetryの興味の中で特にW. H. Audenとその仲間間に焦点を当てているが政治参加と思想転向の問題が大きい。後者はアイルランド文芸復興とその後の発展として面白い面と、先の英米のModern Poetryの中の巨人Yeatsへの関心が主たるもの。そこから問題は近代のpoetic dramaの可能性、'Last romanti'と自己規定したYeatsとロマン派の詩人伝説の問題などが浮び上って来る。

米沢 清寛

学生時代に最も興味を持って読んだのは、E. M. Forster という英国の小説家(1879-1970)であり、彼への関心は今日まで一貫して持続している。彼の名前を初めて耳にしたのは大学二年生の深瀬基寛先生の英語の授業においてであり、先生は日本では、殆ど読まれていないしかし優れた小説家として彼の名前をあげられたのである。その後、吉田健一が名著『英国の文学』の「現代」の項でまずForsterを取り上げているのを読んだ。出会いというのは恐いもので、この二つのことがなければ、Forsterに関心を持ったかどうか疑わしい。彼のどこが面白いのか。ありふれた日常生活を描くその優れた喜劇的手法だけではさほど関心は持てなかったであろうが、それにプラスして彼には、超自然的世界、不可視の世界へのかかわりがあり、そこから「詩」が生まれてくる、という点に私は魅せられたようだ。

その物事を割り切らない、懐疑的でバランスのとれた考え方にも大きな影響を受けた。

その他Jane AustenとかVirginia Woolfを読んで来たが、アメリカ文学では、Nachaniel Hawthorneに悲劇的と喜劇的という相違はあっても、Forsterと似通った一面があると勝手に考えて、興味を持っている。

稲生 幹雄

シェイクスピアを研究しています。シェイクスピアについては、ルネッサンスのイギリスでの実際の上演方法に不明の点が多く、批評家たちの視点も400年ほどのあいだに様々な変化を示し、かつ、作品そのものが多様であるために同じジャンルのものでも一律の分析方法ではとらえきれない、といった問題があります。そんなわけで、私も現在は、文体(style)、作劇術(dramaturgy)などの面から個々の作品の中心に迫ってゆくという方法で分析をつづけています。

松原 良治

英語学(English philology)、特に中英語(Middle English)の統語論(syntax)に興味を持っています。今まで、中英語ロマンス(Middle English romances)の準動詞(verbals)の形態と機能の発達状況を考察するため、Havelok the Dane(1285年頃)やSir Thomas MaloryのLe Morte d'Arthur(1470年頃)などを中心的な記述の対象としてきましたが、将来は更に対象を拡げて、特定の時代の言語現象を記述する共時的研究の集積に努め、古英語(Old English)から近代英語(Modern English)に至る英語の諸相の通時的研究を進めてゆきたいと考えています。更に今ひとつの研究対象は、Malory自身の英語の諸相を記述することですが、最近はその題材によって「フランスもの」、「ブリテンもの」、「大ローマもの」、「ノンサイクル・ロマンス」などに分類される夥しい数の中英語ロマンス群やMaloryによって集大成されるArthurian Legendsの系譜的研究にも強い興味を覚えています。

稲積 包昭

初期近代英語時代(1500年-1650年)の散文を対象に文法的特徴を調べています。なかでも現代英語散文の元祖とも言える16世紀イギリスの人文主義者Roger Ascham(ロージャー・アスカム)の3つの英語作品を研究対象に文法の各分野からその特徴を明らかにしてみようと調査をしています。

西光 義弘

高校時代の英語好きが高じて、英文法に興味を持ち、受験勉強そっちのけで、Hornby、市河三善、大塚高信などの法文法に関する著書を読み、言語学及

び英語学の道へとのめり込んでいった。それ以来20年近くになり、ようやく最近、自分独自の言語理論らしきものを展開できるようになってきた。借りものでない自分の言語観を確立しつつある今日この頃である。その考え方によれば、人間の知覚及び認識が言語構造に反映されており、自己意識、主観性、客観性が言語表現に表わされているということになる。また表現性のうすい言語構造には習慣的行動(自動車の運転など)と平行的な構造を具現しているといえる。現在の課題は日本語と英語の文法をこういった観点から見直すことである。

森本まゆみ

初めのころは文体論をしたいと思っていたので学部では英語学を専攻しました。たまたまそのとき選んだのがヘンリー・ジェームズの小説で、大学院に進んでからは主にジェームズの小説の技法を考察してきました。興味があるのは近代小説ですが、ジェームズは後世の小説家に少なからぬ影響を及ぼしたので、結局、その流れをくむ現代小説にまで興味は拡がってしまいます。それで、今のところはジェームズを軸として、近代以降のアメリカ小説を研究しています。

米本弘一

19世紀の前半、イギリスで最も人気があった小説家はWalter Scott(1771-1832)であろう。日本では明治の初めに『湖上の麗人』の詩人として紹介されているが、彼の本領はやはり30余りにものぼる長篇小説にある。スコットはいわゆる「歴史小説」の創始者と言われているが、彼の影響は後の19世紀小説、特にユゴー、バルザックなどの作品に及んでいるとされている。彼の小説はその後しばらくの間あまり読まれることなく、特に日本では本格的な研究は皆無に近い状態であった。しかし、近年欧米ではその再評価のきざしが見られる。彼の膨大な量の作品を一つ一つ丹念に読んで行く事が今の私の仕事である。

水口志乃扶

語学屋である。文法はつまらない、という考えが日本では未だ幅をきかせているようではあるが、動物と人間の根本的相違が、火と言葉を使う能力にあることを思えば、人間の言語能力を解明したいという欲求は、あながち理由のないことでもあるまい。

言語学は、音と形と意味の領域に大きく分けられるが、私が最も興味を持っているのは、意味の分野である。文のレベルでの意味概念の分析もさることながら、文よりも上の談話のレベルでの分析に、今は特に興味がある。分析の対象とする言語は、目下のところ現代英語であるが、日本語や他の言語もこれから研究してみたい。

ALISTAIR SETON

Publications recently have included "Hills and Water-Kobe Sketchbook"(1980), "Night and Day" by Tom Stoppard(1982), jointly edited with Tanaka Masao and Tsuda Yoshio, "Songs for One World"(1983). Another work, "Japanese Vocabulary for Readers and Speakers" is currently being revised with Hayashi Noriko and Matsumoto Nobuko for publication this year hopefully. Much of my teaching at the Literature Faculty involves Modern British Drama and I have plans to write about Ayckbourn and Stoppard, as well as jointly editing another play.

ドイツ語

吉安光徳

演劇学という学問の体系はおよそ半世紀ほど前にドイツで打ち立てられたものですが、未だに演劇史、劇場史の域を越えていないように思われます。この域を半歩でも越えた体系が出来ないのかと未だに夢を見ています。具体的にはブレヒトの演劇と演劇論を梶手に古今東西のあらゆるドラマに楽しく切り込んでいます。最近になってようやくギリシア劇の大きさが少し判って来たように思っています。

得津伸三

ひとつの科白や文章が同時に二重の(あるいは三重の)意味をもち、そのことによって面白味が増幅する場合がある。落語のオチにもしばしば用いられる。たとえば三遊亭金馬の落語「孝行糖」では、飴売りの子供がぶたれた身体の個所を尋ねられて、「コウコウト、コウコウト」と答える。飴の売り声そのまま返答になっているわけである。

数少ないドイツ喜劇のひとつ「こわれがめ」(クライスト作1777-1811)にも建前の文意と本音(揶揄などを含む)の文意をダブらせた文章が随所にある。ドイツ語で読む(聞く)限りでは、その二重性を理解して、おかしみを感じておればよいのだが、日本語に翻訳するとなると大変である。この戯曲は有名なので現在までに十種類近い邦訳が出されており、まだまだふえても不思議ではない。百人訳せば、百種類の訳が可能だからである。翻訳というのは一回限りのものであり、授業中のように「実はこういう裏の意味もあるのだよ」というわけにはいかない。フェアーではないが、注をつけるぐらいが親切な態度といえよう。こういった点に関して、既刊の翻訳がどれほど苦勞しているのか、あるいはしていないのかを一度吟味しようと思っている。

森 良文

レッシングからハイネあたりまでのドイツ文学に関心を集中させるように努めなければなるまいと考えている。チェルヌイシェフスキーの一つの小説「何をなすべきか」が若い革命家の一代を育てあげたというレーニンの証言は何を意味しているか、その

チェルマイシェフスキーがドイツ文学のレッシング時代をいわばロシア文学の一つの手本として思い描いていたこととそれがどのように結びつくかが、説明すべき私の遠い目標であり、たとえばハイネの晩年が人の一生の生き方の問題として、またマルクスとエンゲルスの仕事との関連で、どのように理解しうるかがさしあたりの目標ということになる。しかし、現在の私が過去の、たとえばドイツの歴史と文学から何を、どのように学びとるべきかということは、私にとってそれほどやさしい問題ではなく、レーニンとエンゲルスの導きの糸をつかむのに苦勞して、このところドイツ農民戦争（1524／25）、とくにトーマス・ミュンツァーのあたりをうろついている。

神代尚志

18Cから19Cにかけては、古い絶対主義的封建社会が崩壊し新しい市民社会が形成されていく大きな変革の時代であった。この変革はヨーロッパのほとんどの国々を変革の嵐の中にまきこみ、人間存在の意味が根底から問われた時代である。レッシング、ヘルダー、ゲーテ、シラー等のドイツ・クラシック文学が成立したのはこの時代であり、彼らの作品はこの過度期の社会の変革とそこに示された人間存在の危機とのまさに血みどろの闘いから生れたのである。

一方ひるがえって我々の時代を考えてみると、ナチスの行為が端的に象徴している如く、現代ほど人間の存在が大きな危機にさらされている時代はない。

私の研究の関心は広い意味での「歴史劇」にある。特にシラーの歴史劇にある。シラーは彼の時代の人間の危機と混乱を16Cから17C前半にかけての宗教戦争の時代におきかえて彼の時代の問題をみていたごとく、私も現代の問題を18Cにおきかえて考えてみたい。そのことによって現代の問題が一層鮮明に浮かび上がってくるように思う。宗教戦争の時代とフランス革命の時代と20Cの現代の問題を広い意味での「歴史劇」を手がかりとして考察することが現在の私の中心テーマである。

光末紀子

私が文学の中で最も関心を持っている領域は、詩、それも抒情詩である。そもそも大学に入ったときにドイツ語を選択したのも、もとはと言えば、ひとつには、それまで翻訳を通じて読んでいた、ドイツ文学の作品中に漂う、憧れに満ちた抒情的なものに魅かれてのことであった。その後、本格的にドイツ文学と取り組むことになって私が研究の対象としたのは、二十世紀初め頃から活躍を始めた抒情詩人R. M.リルケであった。しかし私がこの詩人において最初に問

題としたのは、詩人の中期の、非あるいは反抒情的な作品『新詩集』である。抒情詩人がなぜ抒情的である訳にはいかないのか、これが私の研究の出発点であった。その後テーマは色々と変ったが、ここ数年またこの出発点に戻り、目下は『新詩集』と同時期に創られ、プルースト、ジョイス、フォークナの小説などとよく同列に論じられる、散文作品『マルテの手記』に取り組んでいる。

鎌田道生

私の研究テーマは、誤解されることを覚悟して言えば、人間である。すべての学問の根底にある人間、その人間への関心である。いわゆる専門、専攻分野といえば二十世紀のドイツ、オーストリア文学、それも特に長篇小説ということになるうが、それも私の人間学の一端に過ぎない。世界を一つの総体として捉えようとしつつ、常に挫折に至るロマン＝長篇小説の試みは、人間の全体性を追求する精神の試みに他ならない。ヨーロッパという全然異質の文化圏において、ここ数世紀の間に隆盛をみるに至ったロマンは、ホメーロス以来の西欧文学の、ひいては西欧の理性と感性の集約体として私の興味を限りなく牽きつける。私の研究は、それ故、人間の原型を求めて古典世界へと遡及せざるをえない。そしてそれはまた、短い生を賭けるに値する試みである。

櫻澤正勝

ドイツ・ロマン派、ことに幻想とユーモアの作家ホフマンを愛読する。他に翻訳という作業に興味を持っている。又教室でドイツ語を教えるのが好きである。二十年以上もドイツ語と付き合ってきたから、ドイツ語の森のどれが本筋でどれが脇道であるかを心得ていて、本筋を順序よく、分りやすく教える術を、プロのコックさんがおいしいビーフ・シチューを作る術を身につけているのと同じ程度に、私も又身につけているつもりである。

枘田義一

ドイツ語学・ゲルマン言語学。専攻はドイツ語の史的発展の研究、特にSyntaxの通時的研究。ゲルマン系言語で最古の文献資料を残すゴート語（4Cの民族移動期のゴート人の言語）から古代・中世・現代ドイツ語迄を対象とする。現在は、中世ドイツの代表的な英雄叙事詩である。「ニーベルンゲンの歌」における文章論的特質を実証的に考察し、現代ドイツ語の文章論における諸現象を深く理解することに努めている。

谷本慎介

興味の中心は、ニーチェおよびその周辺の独文学にある。まず、人格形成上ニーチェに最大の影響を及ぼしたのは、哲学者ショーペンハウアーと、芸術

家ヴァーグナーと、歴史家ブルクハルトだと思われ、この三者がいかに、ただ単に思想上だけでなく彼的人格全体に作用したか、を今のところ見極めたいと思っている。何より生身の人間としてのニーチェに興味があって、そこからたとえば周辺の文学者たちはそういうニーチェをどのように受用していったかという点にも興味がつながってゆく。

内田正博

十九世紀の末から二十世紀初頭にかけて活躍したオーストリアの詩人、劇作家、またすぐれたエッセイストでもあったフーゴー・フォン・ホーフマンスタール（1874～1929）をいちおう学びの対象としています。今のところははまだ、彼の生涯の中でも初期にこだわっており、これまでも例えば、『第六七二夜の童話』（1895）他、その頃の作品について考えてきましたし、これからもしばらくの間は、この時代に潜んでいる、この作家の豊かな可能性の芽を探り出してゆきたいと考えています。

原 克

研究範囲は現代ドイツ文学である。なかでも中心テーマは、フランクフルト学派のヴァルター・ベンヤミン及び今世紀のアヴァンギャルド芸術である。目下取り組んでいるのは、1910年代から2010年代にかけて起こったダダイズム運動の内、主にベルリン・ダダである。なかでも、カール・アインシュタイン（詩人・評論家）とG・グロス（画家）を中心に、ドイツの文化伝統を重い軛の中で、◁大衆社会＞を背景に、自らを「叛-芸術」として定立してくる彼らの営為が持つ歴史的・今日的意義を探ろうとするものである。これは、人間の全的解放というファクターを通して、W・ベンヤミン更にはTh. W.アドルノの現代芸術論と深く関連する問題を孕んでいる。しかもそれは他ならぬ我々の時代の問題でもある。従って、今後の見通しとしては、両者を共に捕える美学・思想の視点を探ってゆきたい。

フランス語

本田 烈

目下の勉強は、フランス文学とはまるで無関係な、ましてや「フラ語」なんかクソクラエ、この国の、明治18年に生まれ大正15年に死んだ、無季自由律の放浪俳人、尾崎放哉の人と作品についてである。年齢と共に根気がなくなって、小説でも短いものの方がいいし、詩歌も短いものに惹かれる。「暮のうらに廻る」なんという句があるのだ。それが済んだら、まるでそれとは無関係に（私は浮気性だ）、長年の宿題ではあるのだが、ガストン・バシュラルの勉強である。1962年に76歳で死んだ、自然科学と人文科

学の双方にまたがって魅力にあふれる学問をやったフランスの思想家である。「想像力とは、事物のなかに運びこまれた主体以外の何ものでもない」なんていう文があるのだ。この大学をやめるまでに、さて、どれだけの勉強ができるやら。

山口俊章

近・現代フランス文学専攻。

近代については、スタンダールを中心に、フランス革命後のロマン主義文学を研究課題とし、現代については、アラゴンを中心として、目下のところは両大戦間の状況と文学の研究を課題としている。

スタンダールらは、革命後の混乱期に新しい人間の生き方を求め、近代的自我の表現を文学に託した作家であり、またアラゴンらは、二度の世界大戦を経験したこの二十世紀にあって、人間の復権を志向しつつ、そのために絶えず文学の革新を実践してきた文学者である。

われわれ人間は実存的存在であるとともに歴史的存在でもあり、過去・現在の文学を研究することは、そうした人間の二元的存在性を統一しつつ、今日、明日をより切実なものとするであろう。拙著「フランス一九二〇年代－状況と文学」（中公新書）は、そうした問題意識にもとづく研究の一端である。

技川昌雄

現代フランスの記号論的角度からの文学研究を主に勉強してきたが、昨今は精神分析に強い興味を抱いている。一般の記号論がむしろ◁統辞論＞的分析を中心に展開し、ややもすれば分類学に墮す危険性があるのに対して、精神分析はこれに◁意味論＞的裏づけを与え、垂直的な深さへと掘り下げてゆくのを可能とするように思われる。その点で、フロイトーラカンの記号理論を経過した今日の時点での新しい模索として、クリステヴァセルネ・ジラルルの広い意味での象徴理論には並々ならぬ関心がある。

林 博司

我々を取りまく世界の認識がどのように言語化されるのか、即ち、どのような文法範疇で処理され、それがどのように言語化されるのか、またその際の制約はどんなものか、という問題を、理論面と具体面から研究する。理論的には、諸言語の表面的な多様性の下には人間共通の普遍性が潜んでいるという仮説の上に立脚した考えを採っている。具体的には同じロマンス系のフランス語とルーマニア語、異系の日本語、との比較対照研究を行っている。今までは主にフランス語とルーマニア語の音韻論的側面を取り上げてきたが、最近はフランス語、ルーマニア語の意味論・統語論的側面をも取り上げている。今後、日本語との総合的な対照研究を進めていくつもりである。

中国語

寛 久美子

唐詩の研究のほか、中国文学における女性像を追うのを一つの目標としている。長い歴史をもつ中国のことだから、文学に反映するものも複雑な様相を呈していて、なかなか一つにつかみきれない難かしきがあって、思考も低迷しがちである。古くは「詩経」における女性たちの姿。「列女伝」における模範的な烈女たち、非道な悪女たちの像。「女誡」とその著者の周辺。日本と中国の女訓書の検討など初步的な仕事を行ってきたが、これからは更に文学そのものにおける女性に迫っていきたくと考えている。

ロシア語

小野理子

ロシア・ソビエト文学を専攻しています。ロシア文学はひろく社会と人間のかかわりについて考える伝統を持って来ましたが、自分の研究態度もそのようでありたいと思います。

最近の研究テーマは2つあり、1つはチュルヌイシェフスキーを中心とする19世紀ロシアの女性解放思想の流れを考えること。ドストエフスキーやトルストイにも、この光をあててみるといろいろ新しい発見があります。他の1つは現代ソビエト文学にかかわる問題で、M.コリツォフを軸に、1936～8年のスペイン人民戦争と、それを支援したソビエト作家たちの関係をしらべています。

文学部比較文学科に進んでロシア文学を勉強する学生（現在は毎年1名程度）がふえ、将来よい研究仲間ができることを願っています。

村井隆之

ツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルストイ、ショーロフ—いずれも世界文学全集でおなじみの名前である。筆者の専攻は、これらの作家が活躍したロシア・ソビエトの文学研究。より厳密に言うなら、詩文学の研究。小説に興味がないわけではなく、ツルゲーネフやゲルツェンなどにも論文を捧げているが、韻文で書かれた詩文学のほうにより大きな魅力を感じ、研究対象はもっぱら詩人たち。とりわけプロコク(1880-1921)という詩人にひきつけられ、二十数年この詩人の研究を続けている。最近では、日露両国の文学的関連にも関心をもつようになり、この方面の比較文学的研究の試みを始めている。ちなみに最新の論文は「渋谷定輔とタラス・シェフチェンコ」。日本の農民詩を始発の地点に立たせたことで評価される詩人とウクライナの詩人との関連、両

詩人の作品の比較研究である。

西洋古典語

鈴木一州

古代ローマ共和政期における市民共同体ローマの発展が大きな研究主題であるが、当面の関心事は、①共同体の存立を支える精神的基盤（共同体倫理）と国制の関係から独特のプロウォーカーティオー（民会提訴）を見直すこと、②上記にまつわる各種の伝えの史料批判という意味でリウィウスの史書を検討すること、この二つである。

橋本隆夫

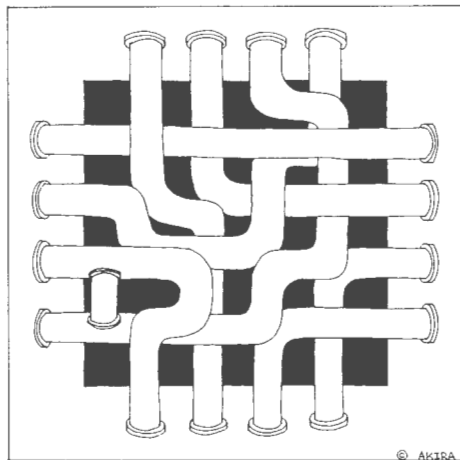
古代ギリシャの文学作品に現われる神話・伝説をその宗教的背景から検討し、文学と神話と宗教の渾然一体となったギリシャ人の文学世界を観察する。

日本語・日本事情

田窪行則

現在の仕事は、生成文法理論の研究と、その日本語・朝鮮語等への適用が主です。日本語教授法の研究も並行して行っていますが、分野自体が歴史があさるので、実際には、英語教授法に関して書かれた文献を読んでいるといった状態です。

他に、マルタイ言語学、特に満洲文献学、朝鮮語文献学も研究していますが、今のところは開店休業といったところです。



自然科学史

今津健治

近代日本における産業技術史に関する実証的な研究を進めている。研究資料は主として文献や文章による場合が多いが、実証史学としての地位がほとんど確立されていないこの分野の研究では、基礎資料の発掘調査から根気強く積みあげていく以外に道はないのである。エネルギー輸送史と技術者たちの活躍の跡を追うことを相変らず続けているが、そこには工業化の条件であるエネルギーと情報の問題が集約化されているばかりでなく、世界に通じるネットワークもある。また伝統的な生活文化とのかかわりについても、考察を深めなければならない多くの課題を見出すこともできる。

情報科学

小野厚夫

昭和55年10月に筑波学園都市に新設された文部省高エネルギー物理学研究所物理研究系泡箱写真解析部門から、情報科学科へ移ってきました。これまで原子核物理実験、素粒子物理実験の研究および電子計算機による図形認識、図形処理、データ処理系の開発研究に従事してきており、現在特に飛躍粒子の図形認識に興味をもっています。高エネルギー物理学の次期計画であるトリスタンプロジェクトが61年の完成を目指して進行中で、各大学から研究者が集まって大型測定器の建設を進めています。私共もこのプロジェクトに参加し、主に測定器の大型解析プログラムの開発整備を担当し作業中です。

数学

請川高三郎

一筆御報告せねばいけないと思ひ筆をとりました。私の分野は代数学、詳しくは非可換環論、あまり社会との関連もなく、然し数学の本質はゲームだとの有名な数学者の言葉を聞けば納得もできます。現在やっているのは浅野整環の一般化として非可換な乘法環をはじめました。色々の得られた結果は学会に発表していますが、学内においても優秀な協力者を得、国内にも興味をもつ若い人も増えてきましたし、特に海外にもグラスゴー大学のP. F. Smithさんの様な協力者を得たことは、身にあまる光栄、幸運に思っています。まだまだ、仕事はこれからです。頑張るつもりです。

木村郁雄

教養部で渡辺清さんと一緒に主に多変数関数論をやっています。もう何年前かに亡くなりましたがこの方面の偉大な先達である岡潔先生に若い時から憧れて、あのような業績の1つでもという願望を持って30年近く執こくやっています。しかし何時の間にか齢50を数え段々とあやしくなってきました。先人の業績は前人未踏の巖々たる孤高の峻険をきわめるに譬えられますが、有名なものは正則領域（解析関数の存在域）は擬凸（凸もどきの）であるが、その逆問題いわゆるLeviの問題の解決と、点毎の代数的関係を局所的にその近傍に拡げ、さらに大域的なものに関連づけた層の理論の創始の仕事です。後者はフランスのHenri Cartanによって整理されましたが現在でも代数学や解析学に大きな影響を及ぼしています。垂直な何十米もある目くらむ様な岩壁を全ゆる登山技術の粋を駆使して登り切る、岡先生の論文を読んでいますと随所において、そういう感じにおそわれます。一行毎に深い洞察と大きな決断に満ちた個所があり解読は遅々として進みませんが全く高山に登るようなしんどさを経験します。我々後人はその偉大な業績に圧倒されながら、大きく荒鋤きされた開墾地を整理して、そこに水利を与え肥料を入れて収穫多い田畑にするよう努めていることになるでしょうか。私の仕事では擬凸概念をばらばらにはぐして、その一断面を把え、実はそれが充分性を与えるものであることを証明したものがあります。自分では内心、峻険な山道の傍に咲く一輪の堇の花位の存在意義はあるのではないかと自負しています。それまでの蓄積に一行あるいは一句を加えたものであることは確かだからです。しかし生前の岡先生に論文の印刷をお送りしましたが、何の御返答もありませんでしたので、余りこう言い切れませんがどうか。今は解析的集合の局所的な特徴付けを試み、計算に乗り易い手法を探しています。うまくいくかどうか自信がありませんが、無理にでも希望を持つように自分自身に言い聞かせています。

竹内康滋

可換環をホモロジー代数を用いて研究している。と申し上げても専門外の人には、何のことやらご理解いただけないと思いますので、私の趣味の数学について述べてみたい。ものの数を数えるという一見単純そうに見える事柄が意外に困難であったという経験は少なからずあると思う。コンピュータの発達にともなって数え得る数の大きさは飛躍的に増大した。しかし、ソフトウェアをもたないコンピュータは数字を記憶出来るソロバンにすぎない。今日あるようにコンピュータの働きに高い評価が与えられているのはソフトウェアのためである。ソフトウ

エアの理論的根拠は数学の諸分野にあるのだが、その一つの分野に組合せ理論がある。組合せ理論はパズル的問題の解法の集大成のようなところがあって大変面白い。趣味の数学にするにはうってつけである。ところがこのパズル理論を数学の高度な理論にまとめ上げようという野暮な人間が増えつゝある。私もその一人なのだ。

廣森 勝久

専攻は代数学で、とくに幾何学と関連した可換環論に興味をもっている。

古来、代数学の使命は方程式を解くことであった。話を代数的方程式（すなわち未知数の整式で表わされる方程式で、三角関数や対数関数などの「超越的」な関数をふくむものは除く）に限れば、2次方程式の解法は高校生でも知っているし、3次・4次の方程式にも一応の根の公式らしいものが16世紀イタリアで発見されている。ところで19世紀の初め、ガウスはどんな高次の代数方程式も複素数の範囲でなら根をもつことを示した。（この事実は「代数学の基本定理」と呼ばれ、複素数の最も重要な性質を与えるものである。）一方、アーベルとガロアは、5次以上の方程式を「代数的に」（すなわち四則演算と根号のみを使って）解くことは一般に不可能であることを証明した。根は存在するはずなのに、それを求める「代数的」な方法はないという訳である。これが今日「ガロア理論」と呼ばれるもの起りである。

以上は未知数が1つの方程式であるが、未知数が沢山になると話はまた違ってくる。未知数がn個あっても、1次の連立方程式ならば、教養課程の線形代数学で扱われる。しかし多くの未知数をふくむ高次代数方程式の解法は著しい困難を伴う。このような方程式系の解の集合は一般に代数多様体と呼ばれる「図形」になり（直線、平面、2次曲線、2次曲面などはそのごく簡単な例である）、その性質を解明することは代数幾何学と呼ばれる分野に属する。

代数学は、方程式を解くという古い立場から、数の体系の本質を様々な観点から究めようとする方向へ進み、幾何学・解析学なども結びついて、新しいいろいろの「構造」の発見（発明？）を生み、現在の多岐にわたる分野を包含するものとなった。

さて、最初にいった「可換環」はこうした構造の1つで、幾何学の局所的理論と深い関係をもつものである。

中村 昌稔

専門は関数解析学で、無限次元のベクトル空間—ベクトル空間に和やスカラー倍の演算を連続にするような位相の導入された空間—のうちの、Schwartz空間や核型空間について研究している。これらの空間は、たとえば、量子物理学などで使用されてきた

Diracの δ 関数やヘビサイド関数などを元として含む超関数の空間や、いくつかのタイプの偏微分方程式の解空間などがある。ヒルベルト空間は有限次元ベクトル空間の1つの拡張であるが、核型空間は別の方向への、有限次元空間の自然な拡張となっており、有限次元空間で成立する多くの重要な定理がまた核型空間でもなりたち、数学の他の分野へも応用されている。

渡辺 清

実数を変数とし、その値も実数となる関数（いまままで学んだ関数）を実数値関数といいます。そこで数の範囲を拡げて、複素数を変数としその値も複素数となる関数を複素関数といいます。そして微分法の概念も同様に拡げて、微分ができる複素関数のことを解析関数といい、その性質を調べる分野を複素解析関数論といいます。私が研究しているのは、その複素変数の数をたくさんにした多変数解析関数というものについてです。また、関数の定義されている空間を抽象化して、複素多様体なるものを定義し、その上の解析関数というものも考えます。そして、それらの持っている性質や関係について調べています。この分野を総称して、多変数解析関数論といいます。

物理学

宮垣 盛男

原子核破片の異常性

高エネルギーの原子核—原子核衝突で放出される核破片は、放出されてから数cm（或は数十億分の一秒）以内では衝突の確率が異常に大きいことが発見された。（例えばE.M. Friedlander et al: Phys Rev. Lett. 45, 1084(1980)）これは現在の原子核に関する知識では説明することのできない現象であり、新物質の創成とその崩壊によるとか、核破片の形が球形から著しく離れていることによるなどの解釈が試みられている。

私は本学理学部と大阪市立大学の研究者と協同でこの現象を解明するため、核子当り19億電子ボルトの鉄原子核を炭素および鉛の標的に照射し、入射・衝突した鉄原子核の破片をしらべる実験を計画し、準備中である。鉄原子核の照射はカリフォルニア大学のローレンス・バークレイ研究所のペバラック加速器によって、4月上旬に行われる予定である。

なおこの解析には約2年の日時が必要である。

小早川 恵三

故湯川先生が中間子論をとらえられたのは1935年である。翌年宇宙線（宇宙から地球にそそいでいる高エネルギー陽子や原子核とそれらが大气中の原

子核と衝突してつくるいろいろな粒子）中に μ -中間子が発見された。しかしこれは湯川先生の予言した中間子ではなかった。約10年後やはり宇宙線から予言された中間子が見つかり π -中間子と名付けられた。今では π -中間子は強い相互作用をするハドロン仲間パイオン、 μ -中間子は強い相互作用をもたないので、電子と同じレプトン族でミューオンと名が変っている。

私の修士論文はミューオン、博士論文はパイオンについての理論的な仕事であった。その後20年もの年月がたっているけど、芸のない話で、いまだにパイオンとミューオンの間を行ったり来たり理論やコンピューター計算をするだけで、一向に埒があかない。もっともまわりの状況も変わった。ハドロンはより基本的なしかし実験でありのままには見えないクォークからできているとか、高エネルギー加速器がどんどん粒子のエネルギーをあげ、自然界ではめったにお目にかかれぬ新しいチャーム粒子とかウィークボソンとかをつくり出す時代になった。それなりにとり上げたいテーマは盡きることはないけれど、時間、新しいことをこなす包容力や能力と相談せねばならない。一方気持ちの余裕があれば、今迄と違ったこともしてみたいと思ったりする昨今である。

伊佐 雄

強誘電体の相転移

転移点の近傍で誘電率が著しく変化することはよく知られている。それを知るためには、広い周波数範囲にわたって誘電率を測定し、いわゆる誘電分散を調べる必要がある。周波数範囲によって測定方法は異なるので、比較的測定装置が入手し易いI OGH.z帯を中心に、導波管を使用し、温度範囲を室温から200°C程度まで変化させて、マイクロ波誘電率を調べている。

森井 俊行

最近、素粒子物理学における量子色力学(QCD)の理論は、物質の基本構成要素と考えられているクォークのふるまいを記述する正しい理論として増々多くの物理学者の信ずる所となってきた。QCDによれば、素粒子の構成子であるクォークが素粒子の中に閉じこめられていて、単独では存在できないことが予想されるが、このクォークの束縛状態である素粒子の質量レベルや崩壊現象をQCDに基づく相互作用の研究を通じて分析し、その力学的構造を調べている。また、高エネルギー素粒子反応でのジェット現象や多重発生現象の解析を通じて、クォークやグルーオンがどのようにして素粒子に転化するか、そのメカニズムを分析してクォーク、グルーオンの力学を現象論的に調べている。

鍋木 誠

「物性」と言う言葉は、日本の物理屋が作り出した言葉だそうで、なかなか含みのある言葉だと思います。人に「御専門は？」と聞かれると「物性理論です。」と答えています。英語となると「Solid state physics」で「物性」と言う感じが全くなくなってしまいます。一度語学の先生に日本語のもつニュアンスをそのまま表現できる訳し方がないかどうか伺いたいと思っているのですが。現在は、物性理論の中の磁性理論を研究しています。また、物性の手法が使える素粒子の現象論にも少し手を出しております。

小原 孝夫

ある種の金属合金及び金属間化合物の磁気的振舞は、ある条件下では非常に特徴的である。これをそれが構成されている元素の原子核について磁気共鳴(NMR)という微視的手段を通して特徴的振舞の機構を探ると同時に、物質の磁性についてより正確な知見を得ようとしている。具体的にはI強磁性(ある温度で電子の磁気モーメントが同一方向に秩序化する)Niや反強磁性(前述のモーメントが上・下と交互にそろう) α 相Mnを粒径や膜厚を20~100Å(A°=10⁻⁸cm)にしたり、或いは磁気モーメントのゆらぎが大きいとされる β 相Mnに20~40 kbarの圧力をかけ格子を縮ませでの測定を主にHe温度(1k~10k)で行なう。共に通常状態とは異なる磁気的性質が現われるが、測定の目的はその主要な役割を担う3d電子の状態を明確にとらえる為である。(II)超伝導(ある温度以下では電気抵抗が急激に0になる性質)と磁気的秩序(ある温度以下では前述の磁気モーメントが一定のルールであろう)が同じ物質内で、起こりにくいとされていたが、比較的最近ReRh₄B₄, ReMo₆S₈(Se₈)Re: 希土類金属という物質群でその2つの性質が共存するという報告がされた。それらの物質の電子状態を探る為、及び他の系で違った型の共存が起こり得ないかを調べる為NMRを主な手段として研究を進めている。

原 俊雄

物質の窮極像を解明する為の高エネルギー物理学実験を行っています。物質を構成している基本粒子はクォークと呼ばれていますが、その4番目のクォークで構成されている新粒子(チャーム粒子)の寿命その他の性質を調べています。具体的には、日米科学協力事業のもとに、日米韓加の4ヶ国が参加し、米国のフェルミ研究所の巨大加速器を使用し、チャーム粒子を生成させ、原子核乾板と電氣的検出器を組み合わせた装置で、その性質を調べています。私達は、原子核乾板の製作、実験、解析を担当し、現在、理学部と教養部において、解析を行っています。2年後には、5番目のクォークを含む新粒子(ビュ

ーティ粒子)を検出する実験を、やはりフェルミ研究所で行うことを計画しています。

化学

本岡 達

リン酸塩は肥料、洗剤、水処理、食品加工、窯業など多方面にわたって利用されている。これらのリン酸塩には、カチオンの違いによる種類のみならずアニオンの違いによる数多くの種類が存在する。これらの種々のリン酸塩を合成するとともに、その性質(金属イオンを封鎖する能力、固体表面の酸性質など)を調べている。また、これらのリン酸塩を機械的に処理(たとえば、ボールミル処理)したときの構造や性質の変化を追求している。

北谷 正行

石油原油中にダイヤモンド構成単位とみなされるアダマンタン(1)という物質が見出され、その成因起源を見なおす一つの要因ともなっている。私の仕事は石油とは関係ないが、アダマンタン類似のカゴ型含窒素多環状化合物(2)を光合成しようとするのが目的である。(近年このようなカゴ型構造を有するある分子が、光→熱エネルギー変換に利用できることがマスコミでも報道された)。目下その目的のための予備実験として、種々のアミドやイミド化合物を準備し、光反応性を検討している。合成実験は金と時間と労力を要し、ときには爆発の危険を伴うこともあるが、それだけにできたときの喜びはまた格別である。



上地 真一

最近、有機化学の領域における弱い相互作用(Vander Waals力、London分散力のような非常に弱い親和力)の重要性が明らかになってきている。この4月にも「化学の領域」誌から、この分野の特集号が出版される予定である。3年ほど前から、これらの弱い相互作用に起因する有機分子の溶液内における動的挙動分子の立体化学、溶質-溶媒の相互作用に基づく分子識別の特異性などを明らかにするために、核磁気共鳴スペクトルのスピン-格子緩和機構の情報をどのように適用すべきかを研究している。現在調べているのは、アルカロイドの基本分子で、将来は、生体高分子を用いて、フレキシブルな「かぎとかぎ穴」的相互作用を構成している本質を明らかにしてみたい。

生物学

坪 由宏

多くの植物ではその生殖細胞の受精の時に雄親の細胞質、とくにその代表的な細胞器官である葉緑体が排除される。つまり雌親の細胞質のもつ様々な機能が優先的に子孫に遺伝してゆく。このようなことは現象として古くドイツのC. Corrensがオンロイバナの斑入りの遺伝現象として見出したことで、高校の生物学の教科書では“細胞質遺伝”の教材として扱われている。実際植物界を見わたせば、雄親の生殖細胞が作られる時にすでに葉緑体が排除されるもの、生殖細胞に葉緑体をもっていても受精時に排除されるもの、また雌雄の生殖細胞が融合の後に、雄親由来の葉緑体がやがて消去されるものなど様々である。ここにも生物進化の一面を知ることができる。今では、葉緑体にも細胞核とは別に遺伝子DNAがあることが明白にされている。私は葉緑体遺伝子の受精時における挙動について、単細胞緑藻クラミドモナスをもちいて生理学や遺伝学の立場から研究を進めている。

湯木昭八郎

枯草菌のアミラーゼ生産に関する微生物遺伝学的研究が私の研究テーマ。昨年から、枯草菌をつかって雑種DNA実験をおこなっている。当面は、これまでやってきた枯草菌のアミラーゼ遺伝子や他のBacillus属の菌のアミラーゼ遺伝子のクローニングを目ざしているが、植物などのアミラーゼ遺伝子についても実験をしてみようと考えている。

内田 昭

酵母菌のミトコンドリアには核と同様に、遺伝子DNAが存在しており、その遺伝子は減数分裂に際して核遺伝子とは異なった方法(細胞質遺伝)で四分孢子に分配される。この分配様式(核遺伝子は2:2、ミトコンドリア遺伝子は4:0または0:4)はどのような機作に支配され表現されているのか、ひとつの作業仮説のもとに検定実験を行っている。

尼川 大作

感覚細胞や神経細胞などが刺激により興奮し、電気信号や生物的工作を生み出すメカニズムを、細胞膜中の物質代謝を追うことで解明していきたい。同じ教室の林文夫氏と共同研究を進めている。材料はシビレイの発電器官やカエルの視細胞などが主である。この他に、動物の行動、特に昆虫の記憶や学習の問題についても関心を持っている。

渡辺 邦秋

高等植物のうちで最も進化し、なお著しく変化しつつあるキク科植物を材料にして、新しい種が生じる(種分化)機構について研究している。現存する自然集団の中に蓄積されている遺伝的変異、特に染色体(遺伝物質の担荷体)の構造や行動を指標にして変異を検出し、それらの相互関係を調べ、変化の方向や生起の機構をあきらかにする。また、変異が生じたり、生じた変異が子孫に伝達されるカナメになっている減数分裂で、遺伝物質が正常に分配されるために必要な機構が、どのような遺伝的制御を受けているのかという問題を染色体が重複している系(倍数体)で解析している。生物が進化する“場”の問題として、以上のべてきた変異生成・維持機構が東アジア・北米・オーストラリア各大陸で、どのように実現されてきているか比較検討を始めている。

林 文夫

細胞を独立した生命体として外界から区分しているのは、細胞膜という厚さ100Å未満の油と蛋白質でできた超薄膜である。この膜は人間にとつての眼や耳のように外界の情報を選択的にキャッチして細胞内の各種小器官に情報を伝え、細胞の反応をひきおこす重要な役割を担っている。私は尼川大作氏と共同してシビレイの電気器官や、物にぶつかっても避けることのできないゾウリムシの突然変異体などを使って、細胞膜上の情報変換機構における特殊なリン脂質ポリホスホイノシチド)の役割を追求している。

角野 康郎

私の研究分野は、生物学の中でも個体以上のレベル、例えば個体群、種、群集、生態系といった単位を対象に、その成り立ちや動態を明らかにして、自然の仕組みを理解しようとする分野、すなわち生態学である。生態学の第一歩は野外調査であり、私も自分の研究材料である水生植物の生態調査や採集のために、各地の湖沼や河川を歩き回る。水生植物というのは、陸に上がって進化を始めた高等植物の一部が、再び水中に戻って生活する術を見出した一群で、さまざまな適応を実現している反面、適応しきれなかったという矛盾も合わせもっている。その生活の具体的解明を通じて生物と環境との密接なかわり、その生活様式が起源した進化的背景というものを考えることができたかと思っている。

地学

寺門 靖高

私は火成岩の成因、すなわち、火成岩を作るものになったマグマが、どのような物質から、どこで、いつごろ、どのようなメカニズムで形成されたかを明らかにしようとしている。日本列島には、世界的にみて多くの火山が集中し、このような問題を解く鍵となる材料が豊富に存在している。実際には、岩石を日本の各地から採取し、それらの化学組成やある種の元素の同位体組成を測定することを主な仕事としている。また、マグマが形成される過程で元素がどのような挙動を示すかを、実験的に研究することにも関心をもっている。

かにしようとしている。日本列島には、世界的にみて多くの火山が集中し、このような問題を解く鍵となる材料が豊富に存在している。実際には、岩石を日本の各地から採取し、それらの化学組成やある種の元素の同位体組成を測定することを主な仕事としている。また、マグマが形成される過程で元素がどのような挙動を示すかを、実験的に研究することにも関心をもっている。

図学

小高 司郎

1. 中心軸測投影図が成立する幾何学上のすべての変数の相互関係を一つの式に記述して、これを1978年の国際図学会議に提案しました。その後この式は中心軸測投影の基礎方程式とか、小高の方程式とか呼ばれているものですが、この式はある条件のもとに解くことは大変むづかしく、未解決の部分が多く残されています。私の研究テーマの一つはこの問題の解決と、この式を使って中心及び平行軸測投影に関する未知の性質を発見することです。

2. 専用の透視図機械や、軸測図機械は、対象の断面図の透視図や軸測図からその全体を合成するものですが、従来この種の機械の欠点は異なる断面間にまたがる線の描写が簡単に描けないことです。私の研究テーマの一つはこのような難点を解決する新しい描写機械の試作研究です。

竹山 和彦

図学、地震工学の分野に興味をもっている。図形の中の隠れた性質を突き出すことは推理小説のような楽しみであるが、そんなに難しい図形を対象にしているわけではない。地震動すらも図形として扱ってしまいそうで心している。現在考えていることは矛盾するようだが、都市と未開発国の震災軽減対策である。都市が懐滅状態に落ち込んだとき排出物の処理はどうすればよいか、アドベ(日干し煉瓦)造の住居の耐震対策は、等々、一寸手が出ない状況である。

村上 晋一

投影法という幾何学的な方法による空間表象と、視覚を通しての空間的広がりやパターンの認識が時として大きく異なっていることが従来知られており、その相異は心理学的恒常性という言葉によって片づけられていたが、心理的な実験をつみ重ねることによって知覚的次元での空間のパターンとしての見え方をそれに相似な幾何学的写像として表象する変換法を導き出し、それをを用いることによって従来不明な空間認識に関する多くの視覚的問題の解決に新しいパースペクティブをもたらしつつある。

西も東も

依田 博

うまく、チキンと同様、日本は大量に輸入すべきである。

第四の失敗は、そんなわけでアメリカでは中古品の売買が盛んなのだが、それをあまり利用しなかったことである。私の家の近くにあるパサデナ市立大学——私が英語の研修を受けたところ——では、毎月第一日曜日にその広大な駐車場が青空市が開かれる。犬や猫から生活用品の一切が売りに出される。犬猫は中古品というわけではないが、その他のほとんどは中古で、それを値切るのがまた楽しい。情報の田中先生も一回見にこれ、素敵な電気スタンドをわずか2ドル少々に値切って購入された。ただ、そんなところでの購入だから、本当に使えるかどうかをその場で確めるわけにはゆかず、私の家でとりあえず試験したら、点灯しなかった。その後、彼にそれが使えるものになったかどうかたずねていない。よく見かけるのは、ナベ・カマの類からその他身のまわりのものを大量に購入して帰るメキシカンである。日本人は、高度成長で購買感覚が鈍ったかもしれない。とにかく売りに出されているものがすごい。十分に使い込んだナベ・カマから、いいかげんスリキレた衣類、ホコリまみれのレコードやカセット・テープ、タイプライター、ガラス食器、とにかくなんでもある。私たちは、15ドルの電気掃除器を10ドルで購入したが、これは田中先生のようなことはなかった。

ところで、大学でどうしてこんな青空市を開くのかといえば、売上げの何%かを大学がピンハネして、学生のサークル活動の費用にあてるのだそうだ。

市立大学は、市民に完全に開放されている。図書館もテニスコートも。テニスコートは、公園にも備えられていることもある。私が今住んでいる家を借りた理由も、歩いて5分ばかりのところにある公園が夜間照明付きのテニスコートを備えていたからだ。

私のいるカリフォルニア工科大学のテニスコートも、原則として誰が利用してもよいことになっている。これが、こちらのルールなのだそうだ。テニスをしていて楽しいのは、ご婦人たちがジョギング・パンツに水着のブラジャーだけでプレーしているのを見ることができることだ。日本のように、決まったテニス用のコスチュームなどない。

コスチュームといえば、私は、こちらに来てからというもの一度もネクタイを着用したことがない。すでに何度もパーティに招かれましたが、学部長か

アメリカで生活するようになってから6ヶ月になる。これまでに色々な失敗を重ね、それを楽しんできた。また、アメリカの実力を思い知らされてきた。

失敗の第一は、ロスの空港に出迎いを頼まなかったことだ。おかげで、空港でバスに乗るのに1時間、ロスのダウン・タウンを歩くこと1時間、それもあの大きなスーツケースを押してウロウロする破目になった。この話をこちらの人にしたら、よく生命が無事であった、といわれるほど危険なことなのだそう。よくあるでしょう、日本人観光客が強盗にあらう、というやつです。

失敗の第二は、とにかく言葉が通じない、わからない、ということだ。だいたい、数字の-teenとtyとの聞きわけができないので、店での支払にずいぶん手間がかかり、軽蔑の目で見られることしばしばであった。19ドルといわれたのに、50ドル紙幣を2枚出す、なんてことをすれば、軽蔑されるにきまっている。電話の契約に行った時も、最初は、"May I help you?" とにこやかに出てきた店員が、すぐに"You can't speak English." といって急に冷めたくなる。そうかといえば、自動車免許の学科試験に日本語の試験用紙があるくらい、非英語圏の人々に配慮する体制が公的には用意されているのである。でも、一般には、英語を使えない人は、この国では全く相手にされなくなるのでご注意ください。

第三の失敗は、観光旅行で来るのならいざ知らず、西海岸に住むものではない。日本の広さでいえば3LDKぐらいのアパートがなんと月に650ドルもする。日本円で約15万円。では、どんなに素敵なマンションか、といえば、実にうすぎたないところで、我々がイメージするアメリカの典型的な素敵な家やアパートは、1000ドルから1500ドルは月に出さなければなりません。これが東海岸ならばこの半分ぐらいですむそうなので、文部省は、今後発展する西海岸への留学生が増加することを予想して費用を算定する必要があると、私は強く主張したい。

それ以外の物価も高く、あるいは日本と差がなく、安いのは牛肉とオレンジぐらいのもので、いくら私が肉好きとはいえ、毎日毎日ステーキを食べるほどではないので、牛肉の安さのありがたさをあまり感じない。ただし、プロイラーを食べている日本人は、食通の資格はない。その点、こちらのチキンは本当にうまい。たまにヤキトリ風にして食べるが、カリフォルニアのワインとよく調和する。牛肉もかなり

② 精神障害者の運動療法の基礎的研究として、精神障害者の体力・運動能力に注目し、これらと精神機能の関係について研究を進めている。

加納 哲也

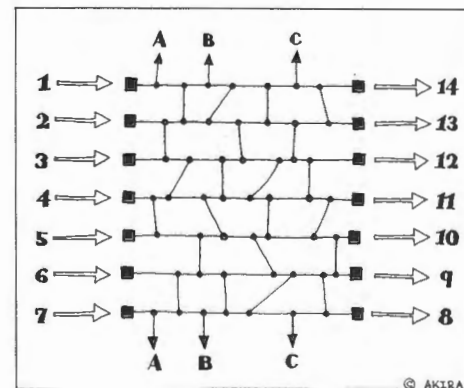
今迄人間の基本動作（歩行）を中心に運動生理学的、すなわちエネルギー代謝面より観察し、その実態及びトレーニング効果などについて検討してきたが、歩行動作の如く生活経験豊富な習熟度の高い動作においてはそれ等の指標を求める事は非常に困難であった。

人間の体力を考える際、全身持久性が大きなウェイトを占めることから現在12分間走を中心にその練習効果、成績の優劣を決めるファクター、持久性向上のためのトレーニング処方について検討中である。

今後今迄のランニング中心のトレーニング方法からより効率の高いトレーニング方法の模索に努力してみたい。また、身体運動を実施する際の外部環境との関係も非常に興味のあるところである。

平川 和文

運動生理学のエネルギー代謝の分野で、特に、身体運動のエネルギーと運動の効率について研究しております。我々の運動に必要なエネルギーは、無酸素的なものと、有酸素的なものとがあり、これらの能力に優れており、かつ効率よくエネルギーを利用できる者ほど、良い記録が得られるわけです。また、特に有酸素的エネルギー能力を維持することは、成人病の予防にも効果があり、健康の維持増進のための条件でもあります。現在、運動中の酸素摂取量の測定と脚パワーの測定を中心に、上記のことを研究課題としております。最近では、学生の体力・健康・生活などのかかわり合いにも興味を持ち、多変量解析法を手段として統計的に分析し、授業内容の検討も考えております。



宮崎 興二

建築における空間の構成を多次的に行なうことが、目下のところの最大目標である。そのために、多面体や曲面といった3次元図形の種類や性質、ならびにその2次元平面上への投影法を図学的にまとめて、それらを多次元空間へ拡張しようとしている。

保健体育

家治川 豊

《中高年令者に対する、至適運動量の目安について》。身体各種器管の老化現象に加えて、最近、運動不足をはじめとする成人病などが問題になっている。そこで、中高年令者の健康保持を計るとともに、運動機能の低下を予防するための、身体運動の目安について、とくに呼吸循環機能を中心に進めている。

山中 保人

最近、約10年間の主だった剣道試合におけるきまり技について調査している。剣道の試合は3本勝負を原則としているが、制限時間内に一方だけが1本を取った場合、または制限時間内に双方有効打突がなく延長戦に入った場合は先に1本取ったものを勝ちとする1本勝ちの制度がある。調査対象は男子が全国高校・学生の全日本、関東、関西選手権など・東西対抗・高段者大会・全国教職員大会・全日本選手権など5242試合。女子は全国高校・全日本、関東、関西などの学生大会・全日本選手権など2392試合について調査した。男女性差による打突部位の相異とか、競技的になり過ぎた剣道の1本勝ちの比率などについて観察している。

野村 治夫

スポーツの場合を例にとると、同じ目的をもって練習しても、上手、下手が生じる。この原因について、動作を高速度映画に撮り、筋電を測り、使った力を測って、その力と使い方のタイミングなどを検討してみると、動作の習熟過程で、共通してエラーを犯しやすい身体の部位があるように思われる。これを習熟の壁とするなら、それを見つけ、改善することで誰れでも上手になれる可能性がある。

現在、バスケットボールのフリースローシューティングでそれをさがしている。

神吉 賢一

① 現在の健康障害の最たるものは慢性的運動不足であることが指適されている。そしてこの解決策は、個人の自覚と社会体育といわれるコミュニティスポーツの振興である。ここ数年この「社会体育振興の基本問題」に関して、対象者、制度、施設、指導者などの面から検討している。

らしてTシャツでいるのに、なんで客人の私がネクタイなどしてられようか。

アメリカは、本当に資本主義の国だ。よく売れる商品は値上がりし、売れないとすぐ値下げする。少々品質が悪くても皆がそれでも買う物は高く、質が悪くても安くならないと皆が買わないものはどんどん値下がります。また、競争も重要である。カリフォルニア・ワインは非常にうまく、今もこれを書きながら飲んでいるのだが、普通のボトルの2倍はあろうかというボトルのワインが約3ドル。味は、十勝ワインなどただの水と思えるほどコクがある。どうしてこんなに安いのかといえば、競争が非常に激しいのである。ビールも同様に、カンビールがなんと30セントほどのだ。アル中社会のはずだよ、ほんまに。魚が非常に高い。数年前までは、とても安かったのだ。ところが、日本人たちが魚をよく買うものだからどんどん値上がりして、私たちは、冷凍の何という種類かわからない魚を月一回しか食べることができない。それも何の味わいもないまじやつを。アメリカは、魚が安くてうまい、と聞いていたのだが。

アメリカにはどうていかなわらない、というのがいくつもある。まずはスポーツ。読売や報知のいう日米決戦、あれはいわないほうがよい。悪質なジョークだ。王のホームランは、十分にアメリカでも通用する。でも、下位バッターのポップフライが風に乗ってスタンドに入る、なんてことはまずないほど球場が大きい。本当に、よい当たりしかスタンド入りしないのだ。それも、ものすごい打球で。

バスケットボールの本場というのも確かだ。2m以上の大男がジャンプすると、バスケットよりも頭が上に出る。日本のバスケットプレーヤーで、そんなジャンプができる2m以上のプレーヤーがいたかどうか、私は知らない。パス、ドリブル、早く巧みである。ダンクシュートは、バスケットがもげてしまうのではないかと思わせるほど揺れ動く。日本でこれに対抗するとすれば、バレーボールの選手ぐらいのものか。ただし、アメリカにプロのバレーがあったら、バレーもかなわらないかもしれない。日米経済戦争の折、野球とバスケットは、テープで購入し、それをナイターの代りに放映したらよい。スポーツが好きな人なら、それを見たら、甲子園で「カケフ」なんていうのがいやになるだろうし、原を応援しようと思わないだろう。

そしてアメリカン・フットボール。昨年、京大が甲子園ボールに出場したことがかなり話題になったようだが、フットボールに関しては本当に何もいたくはない。ただ、経済学者の分析によれば、経済水準があがると、野球よりはフットボールを見る人

が増えるのだそうだ。その意味では、日本も、経済生活がかなり上昇したのかもしれない。

私は、未だにハード・コアを観ていない。そのかわり、というもなんだが、ケーブルTVに加入した。アメリカには、普通のTV放送局とケーブルTVとがあり、ケーブルは受信料を払わないと観られないやつだ。様々なケーブル局があるが、私は最近の映画が観られるというので、ある一つを選んで加入した。日本でも話題になった映画や最近のものまでノーカットの無修正で観ることができる。NHKがそんなことをしてくれませんか、皆さん。ただし、ハードコアはさらに特別に金を出さないと観られないのですが——つまり出せばTVでそれが観られるということでもあるのですが——。ただし、強調しておくべきは、ハードコアを扱っている映画館に限らないことですが、映画館にかかげられるのは、映画のタイトルだけで、例の「扇情的なポスターや看板」は全くないのです。表現の自由は、見たいとか読みたいとか思わない人が、その意志に反して見たり読んだりすることを強いられない限り、認められるべきであることを、それは意味しているのです。いいかえれば、自由とは、あくまでも「選択することの自由」なのです。その意味でも、自由は、まさに西歐的であるように思えるのです。

「紅白歌合戦」を何年ぶりかで最初から最後まで見ました。それは、ロスの時間で12月31日の22時30分から1月1日の2時まで続きました。なんてたって、こっちはNHKにコマーシャルが入るので、それはそうと、今回の紅白は、いったいどうなったのですか。「日本はどうなるのだろう」という感じさえました。この数年の紅白は、その年の男女のヒット曲の優劣で勝敗が決まる傾向にあったのですが、ナツメロ大会とはどういうことでしょうか。NHKの連中は、少々カラオケバーに通いすぎたのでしょうか。歌謡曲というのは、川柳などと同じでその時代の雰囲気や伝えるものであったはずで、もし今の日本がナツメロでその時代を表現することができる、というのであればそれはそれで分析する必要があるテーマです。まあ、おかげで帰国した後で、私の持ち歌が飲み屋でも通用するらしいことは実に慶賀すべきことではあります。

それはともかくとして、歌手のショウマンシップを引き出す企画能力がNHKのスタッフに欠けているのでしょうか。歌手にもその能力が不足しているようにも思えます。研究生活に拘束されてラスベガスにはどうてい縁がありそうにもないのですが、たまにTVでみるバラエティ・ショウは実に迫力があります。そもそも「歌合戦」というのが村祭りの発想なので、それはそれでもっと楽しめる雰囲気

気を出すこともできるでしょうに、舞台上の芸能人をどうしてあんなにNHK的にしてしまうのでしょうか。

新聞やTVニュースに占める国際情報の量もかなりのものです。これは、重要な国際問題にアメリカが深く関与しているからでしょう。逆に、日本の報道に占めるその種の情報の少なさは、むしろ喜ぶべきかもしれません。というのは、外交能力が不足しているのに、日本が首をつっこむべきではないから。

私の4人の子供のうち2人がパサデナ市立の小学校に通っています。彼らは英語を全く知りません。どうなることかと思いきや、親に似たのか結構ずうずうしくやっています。よく知られているように、アメリカの小学校では、個性や才能をのばしてくれる、というのは事実のようです。逆に考えれば、それを示しえない子供は悲劇です。教師は少しも助けてはくれません。何回か小学校に行きましたが——決まった授業参観日があるのではなく親が行きたい時に行けばよいのですが——、その限りでは、「飛び級」のない日本の、全員進級制——いわゆる「落ちこぼれ」をなくせば——のほうが社会の発展のためにはすぐれているように思います。というのは、美しい人はより美しく、そうでない人はそれなりに成長できるからです。ただし、日本社会の課題は、個性のある子供をどうするかでしょう。教育学部の学生の責務は非常に重い。というよりも、無資源国日本にとって、大学教育は極めて重要で、学生は遊ばしておいてはいけない、という印象を持っています。

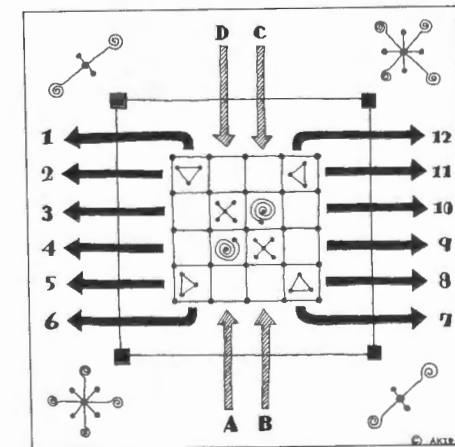
私のいるカリフォルニア工科大学の学生をみると、昼間、学生がトランプに興じたり、ということとは決してありません。図書館等で実によく勉強します。というのも、予習と宿題がとて多いからです。そして「退学処分」がかなりあります。それは成績が悪い学生です。とにかく2年間は、あるいは

4年間は、在籍できるというわけではありません。ですから、昼日中にトランプに興じられないのです。でも遊ぶときにはよく遊びます。それでも、学生が授業に出ないことを自慢にする風潮は、そろそろ無くしたいものです。

最後に、日本とアメリカの実力の決定的な差を指摘しましょう。それは国土の広さとかノーベル賞学者の数ではない。ガソリンの値段なのです。実に、1ガロン(3.79ℓ)が約1ドル。このことの意味はとて深いのです。なんてたって、エネルギー源の問題なのです。技術的には、日本のほうが優秀なところはかなりあります。しかし、この世の中で安いエネルギーと高い技術力を持った国がアメリカ以外にありますか。それだけに、中曽根内閣のように、自衛隊への予算を増やすことは、アメリカへの貢献にはなっても、日本の科学技術能力の向上には全く役に立ちません。むしろ、大学への予算をもっと増やすべきであるかもしれません。何はなくとも技術だけは磨いておく、それが無資源国日本の唯一の選択肢です。ただし、注意しなければならないのは、技術を商品化するときの芸術的センスを欠いてはなりません。というよりも、Arts and Sciencesつまり、Liberal Arts(教養)が重要です。無秩序の中に秩序を見出すセンス、これは教えることではできないかもしれませんが、少なくとも教養部を文化的に多様な状態にしておくことが必要でしょう。

カリフォルニアだけでGNPが世界で第8位になるそうですが、これは、無秩序のエネルギーによるところが大きいように思います。神戸大の教養部は、内外から多様な人々を吸収する体制に造りかえるべきかもしれません。単に建物の配置がわからない、というのではなく、文化的に「西も東もわからない」という状態を新入生に与えるほど無秩序な文化的雰囲気を作り出したいたいです。

(政治学)



Sigrid Karkavelas

Wenn man die Treppe zum fünften und sechsten Stock eines Hochhauses am Kusugawa-Bahnhof hinaufsteigt, begrüßt einen der charakteristische Geruch von Salpetersäure, Petroleum und Druckerschwärze. Öffnet man die Tür mit dem auffälligen Schild aus Kupfer, ist man gleich in der Radierwerkstatt des Oototsu-Ateliers. So oft es meine freie Zeit erlaubt, bin ich dort und schlage mich mit dem Radieren und mit meinen Phantasien herum.

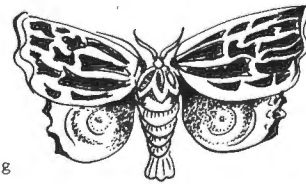
Die Werkstatt besitzt ein Fluidum, das für mich sehr stimulierend ist. Es ist die Atmosphäre der Werkstatt. Radiernadeln, Schmirgelpapier, Werkzeuge zum Glätten, zum Schaben und Kratzen liegen herum, an den Wänden stehen unzählige Platten und Behälter. Es herrscht die Unordnung der Arbeit. Man macht sich die Hände schmutzig. Die Haut wird rissig und rau. Diese Geräte bringen die oft feinen, präzisen Formen auf den späteren Radierungen hervor, die die mühselige Arbeit zu negieren scheinen.

Der Umgangston ist freundschaftlich. Gespräche, Kaffeetrinken, Essen, Warten auf eine Idee, Ballspielen usw. unterbrechen oft die Arbeit. Das Atelier hat viele Mitglieder, die zu verschiedenen Zeiten dort arbeiten. Manchmal, zu Stoßzeiten, wenn eine Ausstellung bevorsteht, ist es eng. Alle Tische sind besetzt, an die Pressen ist nicht ranzukommen. Doch jeder nimmt Rücksicht auf den anderen. Man ist auf die Zusammenarbeit aller angewiesen.

Für mich ist diese Arbeit die Erfüllung eines lange gehegten Wunsches. Als ich früher in Amerika lebte, gewann ich durch so einen Kurs Freunde, die meine Interessen teilten und überwand dadurch eine gewisse Isoliertheit. Es scheint mir, daß hier in Japan dieser Schritt einen ähnlichen Weg öffnet. In Japan sind die Andersartigkeit der Kultur, das Fehlen guter Sprachkenntnisse Hemmnisse auf dem Weg einer echten Kontaktaufnahme, ohne die man sich leicht ausgeschlossen fühlen kann, will man nicht nur mit Ausländern verkehren. Umso überraschter war ich, als ich feststellte, daß durch das Medium der Kunst eine Kontaktbasis hergestellt werden kann, eine Kommunikation und Sprache, die ich nicht erst zu erlernen brauche, die allen Beteiligten gemeinsam ist: Bilder, Begriffe aus der Kunst, Kataloge, Gespräche über Kunst, Japan, das Ausland, gemeinsame Ausstellungen, wenn auch bruchstückhaft, halb verstanden vielleicht, oder nur erahnt, bauen Brücken.

Auch ist wohl diese Gemeinschaft im Atelier Oototsu eine besonders enge, menschliche, nicht kommerzialisierte. Hilfsbereitschaft, Teilen, Anteilnahme werden großgeschrieben. Ich fühle mich dort wohl und bekomme einen weiteren Einblick in das Funktionieren einer japanischen Gruppe, in die unzählige Nuancen der Sprache, die ich nur wenig spreche. Es ist ein Lernen am praktischen Modell. Oft komme ich mir sehr schwerfällig vor in diesem funktionierenden und fein abgestimmten Mechanismus, wo jeder scheinbar weiß, wo sein Platz ist.

Wie kam ich hierher? Ich lernte den Graphiker Shoichi Futami und seine schönen und poetischen Farbradierungen kennen. Er spricht gut Deutsch, war mehrere Male in Deutschland, wo er auch diesen Sommer wieder ausstellt, so daß wir keine Verständigungsschwierigkeiten hatten. Durch ihn kam ich nach Kusugawa. Es entsteht eine Freundschaft durch die Kunst und ich bin dankbar für die Hilfe, Gastfreundschaft und Offenheit, die ich überall erfahre.



芸術が結ぶ縁

ジークリット・カルカヴェラス

阪神久寿川駅の向いにあるビルの階段を六、七階まで昇ると硝酸や石油や印刷インクの匂いが漂ってくる。銅板の嵌った扉がすぐ目に入るがこれを開けるとそこがアトリエ凹凸のエッチング工房である。私は暇さえあればここに来て、銅板と私の空想を向うに回して格闘する。

この工房の空気は私を強く刺激する。それは活気ある仕事場の気だ。食刻針、紙鋸、磨き削り掻くための工具があたりに散乱し、四方の壁には板や瓶類が隙なく並ぶ。仕事場特有の乱雑さ。手は汚れ、膚は荒れ、ささくれ立つ。こうしてここにある器具を操り、油とインクにまみれて始めて一枚の銅板画が生れる。その精巧繊細な画面からこの苦労は想像し難いかも知れないが……。

このアトリエでの付き合いは和やかなものだ。制作の合間に、雑談、珈琲、お八つ、着想待ち、球戯と実に色々なことをする。会員は沢山いるが、いつもは各自が好きな時に来て制作する。しかし展覧会が近づくとこどもラッシュアワーなみの混雑で、仕事台はすべて占領され、プレスはなかなか空かない。だがそれは他人を押しつけて、と言うのではない。他人への配慮、全体の協和は皆がいつも忘れないでいることである。

こういう共同作業こそ私が久しく求めていたものだ。以前アメリカにいた時も同じようなサークルで同好の士と知り合い、それでアメリカ人と私の間にあった壁のようなものを乗り越えることができたのだが、日本でも今このアトリエから同じ道が開けてくるように思う。風習の違いや言葉の障壁があって、日本にいる外国人はなかなか日本人と腹を割った付き合いができない。外国人仲間だけの付き合いで十分だと言うなら別だが、日本人とも親しく付き合いたいと願い出すと、近づこうとして近づけないもどかしさに悩むことになる。こういう事情をよく知っているから、芸術という媒体を通してふれ合いの基盤が生れてくることに気づいた時、私は少なからず驚いた。改めて覚える必要のない言葉、この誰もが知っている言葉——すなわち絵、芸術上の概念、カタログ等を通しての意思疎通。芸術、日本、外国、共同展覧会等について交す会話、それも切れ切れの、半分しか分らない、判じ物のような会話。——これが私と日本人の間に橋を架ける。

アトリエ凹凸での協同の活動は親密で人間的なものである。そこに商売勘定は一切入って来ない。人を助け、人と分つというのがこの綱領である。だからここは頗る居心地が良いのだが、私には日本的集団というものの機能や日本語の細かいニュアンスを一層深く掘むことのできる有難い場所でもある。これは文字通りの「実習」と言えよう。日本的集団——この微妙に調節されて滑らかに動くメカニズムの中では、誰も皆状況に応じて素早く自分の役割を覚る。その中に入った私はしばしば自分の鈍さを痛感するのである。

私がここに来るようになったきっかけは、版画家二見彰一氏の詩情溢れる色彩版画を知ったことにある。二見氏はドイツ語がよく話せる人で、何度もドイツに行ったことがあり、今夏もかの地での個展開催が決まっている。そういう人だから会うとすぐ話が通じた。その二見氏の紹介で久寿川のアトリエに入ったのである。こうして芸術の仲立ちで友情の絆が結ばれた。誰もが私に手を延べ、心を開いて迎え入れてくれることを有難く思っているこのごろである。

(独語) (桜沢訳)

フンボルト研究員として

森井 俊行

西ドイツのAlexander von Humboldt財団からの研究奨学金を受けて、一年間Wuppertal 大学物理学教室で研究することになり、一昨年（1981年）9月30日、フランクフルトへ向けて日本を飛び立ったとき、初めての外国生活に対する期待と不安の入りまじった複雑な気持であった。何しろ今まで一度も飛行機に乗ったこともない僕にとって、これから行くドイツという国がいったいどんな国なのか、全く予備知識もなく、日本でやった、にわか勉強のドイツ語にも全く自信がなく、正直いって不安の方が大きかったが、それでも飛行機に乗り込むとほっとしたのは日本での生活があまりに忙がしく、余裕がないためであったろうか？とにかく10月1日には（モスクワでのトランジットの際、乗りかえた飛行機のエンジントラブルで予定より4時間あまりおくれで、フランクフルトでホテルを見つけたのは夜の12時を少しまわっていたが）もうドイツの人となっていた。

さっそく次の日に汽車でヴッパータールの町まで行き、大学に出て僕のhost professorのシリング教授に会い、これから一年間生活するためのアパート探しのために新聞広告を出してもらったりして、数日そこに滞在した後、再び汽車に乗ってドイツ語の訓練を受けるためにマンハイムという町へやって来た。フンボルト研究員は原則として研究生活開始の前に、最高6ヶ月までのドイツ語研修が義務づけられており、僕は出発前に提出した書類で2ヶ月を希望していたが、後になって少くとも4ヶ月を希望しておけばよかったと後悔した。ともあれマンハイムのゲーテ協会でのドイツ語の勉強が始まった。始め、面接のとき今までやってきたドイツ語歴などについて簡単なことをドイツ語で言われたが、何を言っているのかさっぱり分らないのでポカンとしていると、きれいな英語で同じ質問をやってくれた。この面接がクラス分けの試験をかねていたようで僕はGrundstufe II という初級のクラスであった。授業に出て驚ろいたことはその講義のやり方であった。テキストは一応与えられたがテキスト通りにはやらなかった。一日5時間、朝8時から午後1時まで、適当な休けい時間をはさんでものすごい詰めこみ教育であった。毎日やることが変わり、たとえば、1時間目は本読みと討論、2時間目は文法、3時間目は討論、4時間目はスライドをみながらヒアリングと討論、5時間目は恋人に手紙を書くこと（先生から恋人に手紙を書くように言われた時、あまりにまじめに受取り過ぎて、

「僕には妻がおり恋人はいないから書けない。」と言ったら「これはSpiel（あそび）だから、だれかを恋人にして適当に書きなさい。」と言われて教室で大笑いになったことがあった。）など、生徒が飽きるヒマがないように目まぐるしく変化したが、全体として文法もやさしいものから難かしいものまで系統的に教えられた。テストは毎日のようにあったし、また毎日多くの宿題で、我々生徒はみんな毎日3~4時間も寮に帰って勉強せざるを得なかった。その上クラスの友達みんな日本語の通じない外国人で、たとえば教室で僕の右にすわっていたコロンビアから来て1才の子供をかかえて数学の勉強をしている女子学生のキンテロさんはスペイン語を話す英語はしゃべれなかったし、左どりのカナダからきてドイツで働きたいという18才の女子学生のメキノソンさんは英語はものすごくまいがスペイン語はダメ、中国からの研究者の場合中国語以外ほとんど話せない人が多いし、その他アフリカ、中南米、アジア、アメリカ、東西ヨーロッパ、中近東とあらゆる国から集まった生徒の間で共通の言葉は結局ドイツ語しかなく、学校でも寮でもすべてドイツ語にたよるざるをえないため、みんなむちゃくちゃなドイツ語を必死で話したが、これはとても楽しい経験であったし、これが結局ドイツ語の学習に非常にいい勉強になっていた。生徒の多くはドイツの大学で勉強するために何らかの奨学金を受けてやってきた若い学生、大学院生や研究者であったが主婦や会社員などもいた。毎週のようにパーティーがあったり、週末にはゲーテ協会の組織したバス旅行があったりして、10年位若い若がえった気分であつた。この2ヶ月間の経験は実に楽しい、すばらしいものであった。この期間に、何とかドイツ語がしゃべれるようになっただけでなく、ドイツとはどんな国かということのおぼろげながらのイメージが出来、その後の生活に大いに役立った。

2ヶ月のドイツ語コースの終了後、本来の物理の研究に入るために再びヴッパータールにもどってきた。12月には家族も合流し我々の新しい生活が始まった。それからの一年間、実に色々なことがあったがここでは大学のことその他について簡単にふれるだけにする。

ヴッパータールの町はライン川の流れがドイツのルール工業地帯へ流れ込む少し手前、ケルンから北

北京にて

中川 正之

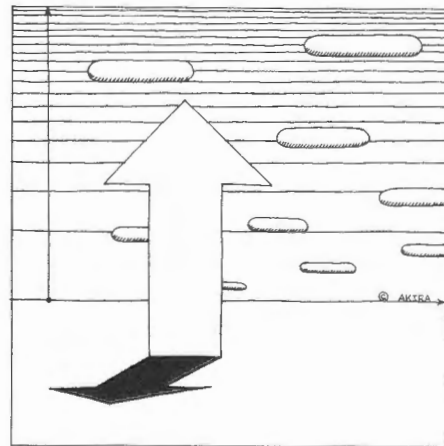
大学生の頃、ほんとうは、イ語・ロ語・モン語などの「少数民族」の言葉が勉強したかった。アルファベットや漢字にはあきあきしていた。当時、京都大学の西田龍雄先生が西夏語の解説で脚光をあびておられた。西夏文字の複雑さが戦慄的であった。匈奴の末裔といわれるハンガリー人の娘に恋をしてラブレターを書くためにのみハンガリー語を勉強した。モンゴル平原やチベット高原、シルクロードに思いをはせながらそれらの地域の言葉をながめていた。しかし、中国文明の偉大さといやしきにも十分不練があり、いやだいやだと思いつつも中国語の勉強を結構まじめにした。その頃のドグマでは、偉大な中国民族の言葉を専門に身につけようという言語に手を出すことは邪道であるかのように思われた。チョムスキーの影響が徐々にしみわたってきて、世界の言葉は普遍的側面を強くもち、どんな個別言語の研究も、人間の言語の解明という共通の目標を持ち得ることが、私が身をおいていた世界でも了解事項となって行く中で、私はうまうまとその波に乗り、対照言語学専攻という看板をかかげることに成功した。もう中国語のみにとらわれる必要はなかった。

対照言語学というのは、言語を系統的つまり歴史的に親属関係にあるかどうかといった立場でみるのではなく、どういうパターンの言語かという観点から言語をみる。たとえば、完了表現はどのようにおこなわれているか（「宿題をしてある」のように日本語でも英語などと同様‘have’に相当する所有動詞を用いることは注意されてよい）、はたまた、鼻と口の間のヒゲをはやしする部分のことを「鼻の下」というのか、それとも「口の上」というのかなどなど、そこではすべての言語が平等である。

此度、中国の各大学の日本語の先生方の再教育機関で、日本語と中国語の対照研究の授業をするために、北京に派遣されたことにたいして、そういう訳で、してやったりという思いを禁じえないでいる。

ますます少年じみるが、中国人と日常的に中国語の問題についてやり合えるというスリルはさておき、私を最も興奮させるのは、私の授業の熱心な聴講者の中にモンゴル族の青年がおり、三度にわたる、シルクロード、内モンゴル、雲南省への旅で、あそこがれのウイグル族やチベット族、モンゴル族、イ族の人達に私がながめられるという体験であった。「日本族の方」と呼びかけられたことや、同行の欧米人達がシルクロードを奥深くはいつて行くに従って私

とは逆に故郷に近づくかのように元気になっていったことなど、「民族」が日常生活の中にあつた。具体的なことをひとつひとつのべていたらきりがなく、とうてい私の表現力では消化しきれない。ただ巨大な中国文化を目のあたりにして、自分もまぎれもなくその文化の周辺民族の一つに属するものであつたということが実感できたこと、それだけは確実に、昨年の10月以後降水を見ず、最高気温が氷点下5度というかわいたつめたい北京にいても、なにやら暖く余音を残している。私はそれらの体験を、そして少年時代からの夢をひとつひとつ反芻しながら「日本族」の住む島へ帰る準備をしている。帰国まであと20日。 (中国語)



へ車で約30分の位置にあり、ルール工業地帯の東のはずれにあり労働者の多い町で、エンゲルスの生まれた町でもある。タールというのはドイツ語で谷という意味であり、町の中心を流れるヴッパー川をへだててゆるい両側の山肌に広がった町で、町の交通機関としてヴッパー川の上を川の流れてそって、シュヴェーベバーンという世界最初のモノレールが走っていて、我が子も毎日これに乗って小学校へ通っていた。さてWuppertal 大学は僕のアパートの向かいにあった古い建物が、数年前に川をへだてた反対側の丁度我が家のアパートの窓から正面に見える位置にりっぱな建物と共に移転したとのことであった。昨年は丁度創立10周年ということで、僕が物理教室でやったセミナーの話も10周年記念の記録として残されていた。物理教室の理論部門の教授はシリリング教授を含めて8名おり、内3名は外国人（イタリア、イスラエル、オーストリア）で、その他にも任期付きの助手クラスの人が数人いたが、ほとんど素粒子の場の理論関係の研究をやっており僕もやっている素粒子の現象論をやっている人は少なかった。実験部門にはもっと多くのスタッフがいて全体として物理学部の建物は堂々としてりっぱなものであった。大学ではセメスターの期間中は毎週のようにセミナーがあり色々な人が来て話していくが、ドイツ人以外の研究者がくることもしばしばで、その時はすべて英語になる。そして時にはセミナーに招待された人が一泊していくこともあり、そんな時はセミナーの終わった後みんなでレストランへ行き、食事のあと大抵はセミナーに招待した教授の家へ行ってワインを飲みながらワイワイ遅くまでしゃべる。大学は夏学期と冬学期の二学期制で、それぞれ4ヶ月あり、残りの4ヶ月は休みである。ドイツでも学期が始まると講義の他に各種委員会があったりして雑用が多くて研究時間がとれないと教授連中がぼやいていたが、それでも夏休みには長い休暇をとって大学にこなくなるし、毎年だれかはサバティカルで大学の義務から完全に解放されている状態をみると我々よりはるかに余裕があるように思えた。ドイツでは教育は社会的事業であり国家がそれを保障するという考え方が強く教育費の自己負担は日本に比べてずっと少ない。たとえば学生は一学期当り約40 DM (4,000円) 払えばすべてO.K., 後は個人の自由で健康保険を含む保険代として月々約50 DM (保険料も学生だとぐっと安い) 位を保険会社に払うだけであり日本のように高い授業料を払うこともない。また学割の特典も大きく学生は大変ありがたい身分のようだ。学生はよく勉強もしているが大抵はガールフレンドやボーイフレンドがいて、夏休みともなると自転車でヨーロッパ一周をやる者もおり楽しそう

だ。ただ最近ではせっかく大学に入っても就職の見通しがなく途中でやめて新しい職業を求めて方向転換する人が増えてきたということも聞いた。これは最近の西ドイツ経済のかげりの反映でもあろう。失業者は200万人をこえ、最大の政治課題は失業問題であることは毎日のニュースでも明らかであった。

さて、ドイツでは季節は一応春夏秋冬とあるが実際には永い冬と短い夏だけだともいわれる。ドイツの寒い永い冬はいつもどんよりとして陰気で、人々はこの暗い冬に打ち勝とうとするかのようにワインを飲み友と語り合う。我々も冬の間はよく招待を受けたり招待したりした。冬は交際のシーズンでありオペラやコンサートもいよいよ出物が集中する。一方暖かくなり5月ともなると人々の関心は夏の休暇（ウアラップ）のすぐし方に移る。そして少しでも太陽が現われると、大学の芝生であろうと、公園であろうと、家のバルコニーであろうと、すぐハダカになる。彼等が太陽を求める気持の強さは我々日本人にはちょっと理解しきれない位だが、永い冬をドイツで過ごしてみて始めて少し分ってきたような気がする。冬の次には春がくるということは、日本にいと実に何でもない当りまえのことであるがドイツに住んで始めて春がくるということが特別な意味があるということを感じ深く感じたものである。それ程ドイツの冬は厳しいといえる。それだけに夏の休暇は特別に重要であり、一年間の内の一大事のように休暇を有意義に過ごそうと必死になる。それにひきかえ我々日本人の休暇の過ごし方はどうであろうか？先日の総理府の「余暇と旅行に関する世論調査」によれば、国民の余暇時間の過ごし方は3日間以上の連休の場合でも「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などの見聞き」29%「何もしないでんびりする」21%で約半数がゴロ寝・ストレス解消型という。それでも生活にゆとりがあると答えた人が51%おり、また最近一年間に「一泊以上の観光・レクリエーション・スポーツなどのための旅行」をした人は46%とのことであるが、ほとんどの国民が3～4週間の休暇をとり、しかも土日は完全に休み（一般の商店・デパート等は土曜日の午後2時までで、日曜日は休み）というドイツと上の数字の示す日本の状況をくらべてみて我々は何を感じるであろうか？

ところで7月の始めに全てのフンボルト研究員とその家族がボンに3日間招待された。講演や演奏会の他、大統領主催による大統領官邸の裏庭での野外レセプションを含む各種の催しがあり、最後には一日がかりでライン川下りを楽しませてもらい、また多くの他のフンボルト研究員とその家族とも知り合いになれてとても有意義であった。ボンへの招待以外にも3月にはエアランゲンへの招待、5月には西ベルン

を含む西ドイツ全土にわたる3週間のバス旅行への招待、ゲテ協会でのドイツ話学習の費用の全額援助、また研究期間中にヨーロッパで開催される研究会や学会などへの出席の際には必要な旅費の援助が受けられること（ちなみに僕の場合、一年間に4回の国際会議出席と帰国前にジュネーブのCERN（ヨーロッパ共同原子核研究所）へ行くために、合計2,300 DM (23万円) もの援助をもらった）等、我々外国人のフンボルト研究員（毎年約1300名）とその家族に対してその援助はなみなみならぬものがある。これらを組織するフンボルト財団とそれを支える西ドイツ政府の力と考え方にくらべて、GNP世界第2位の経済力を自負する日本でこれだけのことが出来ないのはなぜであろうかと思わずにはいられない。

僕にとっても家族にとってもこの一年間のドイツ滞在は短かかったけれどもとても印象深い一年間で

あった。多くの友人も出来たし、中には“du”で呼ばしてくれと言ってファーストネームで呼び合う間柄になった家族もいる。“du”で呼ばれてもこちらは“Sie”しか必要なかろうと思って、“du”の場合の動詞の格変化などきちんと覚えていないのでとまどってしまうが。）とにかく一年間ドイツに滞在してみて、一番強く感じたことの一つは僕ははたして日本のことをどれだけ知っているであろうかということであった。ドイツでは多くの人々に日本人自身のこと、日本の歴史のこと、政治のこと、文化のこと、戦争のこと、広島原爆のことなど色々なことをきかれたが何一つ正確に答えられたようには思えない。今度またいつの日かドイツに行くことが出来たら日本のことをもっと勉強して彼等ともう一度じっくり話してみたいと思う。
(物理学)



ヴッパータールの乗りもの
(シュヴェーベバーン)

このごろ思うこと

去年父に死なれて、自分自身の生を含め人間の生について深く考えざるをえない。社会と接触する毎にひっくり返ってきた私。32になるまで仕事にも就かず、大学にも行けなかった私。そのことについてただの一言半句グチをいわなかった父、優しく父の心の広さが分ってくるにつれ、自身の愚かさ、心の狭さがみえてくる。生前、話らしい話をほとんどしなかった父が一言「なあ尉郎さん、世の中の物事というものは、なかなか自分の思い通りにはいかぬものだ。それはこの歳になる私には良く分つとる。」今だに一目でも父に会いたいと思う。と同時に二度と会えぬことも又明白なのだ。そしてつくづく思う、人の生命の貴さと不思議さ、私に与えられた時の貴重さを。生は死によって限られているからこそ、無限の価値を持ちうる。そのような人間にとり、絶対的価値を有するものはただ生命だけであり、その他の一切の価値は、いわば我々自身により作り出された仮の相対的価値を持つにすぎない。とすれば、どのような人も生命という価値の観点よりみれば相等しいといわざるをえない。自己と他者の生命が価値において等しいということこそ、人間に関する全ての思考の出発点ではないだろうか。では、そのような生命に真の意義を与えるものは一体何であろう。人間であることの本質的哀しみ、それは我々が移ろいゆく時の流れの中でのみ生存を許された存在にすぎぬこと。つまり、時の流れの中に一瞬として停まりえないことではないだろうか。だからこそ逆に生は愛おしく、無限の意味と輝きを持ちうるのだ。人はまさしく死ぬために生きる。そのような我々に残された途はただ2つしかありえない。時に流されるか、時を切り拓くか。無自覚的生と意志的生、意志的生とはどのような生であろう。それは本来の自己を実現せんとする生、すなわち天から授かった自らの独自の性質、個性をさらに自分自身の意志の力によって磨き、伸ばしてゆくことではないだろうか。自らが明確な目標を樹て、現実の自己と目標との距離を学習という自己能力の拡大を通じ一歩ずつ埋めてゆく過程の中にこそ、精神の進歩、生の充実があるのではないだろうか。しかし、それにはまず自らの生に対する愛が必要なのです。では愛とは何でしょう。小さな自己を捨てて、他者を活かすことによって、より大きな自己を捨てることではないでしょうか。だからこそ愛は普遍であり、歓びなのです。もしそうだとすれば、歓びのない学習、自己の能力の

拡大のない学習は学ぶという名に値しない。なぜなら学ぶとは個我を滅却させ、普遍我と一体になること、すなわち、己を空しくし対象に没入することによって、より大きな自己に目覚めることでありましょうから。人が頭で理解できることは高が知れています。本当に分るとは人が全存在を賭けたときではないでしょうか。愛のない人生が生きるに値しないのと同様、学ぶことのない人生も生きるには値しないでしょう。

では、精神の進歩、生の充実が自らが積極的に学ぶという姿勢だけで十分に達成できるでしょうか。それは必要な条件ではありえても、十分な条件ではないような気が致します。というのも、我々が精神の進歩、生の充実を感じるのには、大きな困難に打ち克った時だからです。乗り越えてきた困難が大きければ大きい程、我々は生の充実を感じるはず。すなわち、安逸や容易さではなく、困難や障害こそが我々の生の充実にとって不可欠の要素なのでは。

人間、生きてある限り可能性は無限なのだと思いたい。私は障害者として生れ、障害者として生き、障害者として死ぬ。しかし、それを恥じることなく、むしろ、障害者として生んでくれたことを父や母に感謝できる、そのような人間として生き、かつ死にたいと願う今日このごろです。

(法学部第二課程学生)



日本ライン下りを楽しむ本学留学生諸君

Before I make any comparison, let me introduce two Malay songs which are sung in Malaysia. The two songs are 'Ca Ca Marica' and 'Bengawan Solo'.

Can Mari Can
 Mana Dimana Anak Kambing Saya
 Anak Kambing Saya Ada Dikampung Baru
 Mana Dimana Jantung Hati Nona
 Jantung Hati Nona Yang Pakai Baju Biru
 Can Mari Can Hey, Hey (2)
 Can Mari Can Ketipung Payung

The song above is a light entertaining song sung usually by the young people with the intention of teasing newly made couples.

The first two lines can be of anything and have no special meaning in the song. Its main purpose is just to beautify the song by making the last word from the first line to rhyme with the last word of the third line. Similarly the last word of the second line to rhyme with the last word of the fourth line.

For example:

(1st line) 'Saya' ←————→ 'Nona' (3rd line)
 (2nd line) 'Baru' ←————→ 'Biru' (4th line)

The third and fourth line form the theme of the song. The first two lines have no connection with the theme of the song. This type of song is called 'pantun', or old type of Malay poetry. There are poems with '4 lines', '6 lines', or '8 lines'. That the last word of one line must rhyme with that of the alternate line is the characteristic of this kind of popular Malay song.

'Mana Dimana Jantung Hati Nona'
 (Where is your lover, Missie)
 'Jantung Hati Nona Yang Pakai Baju Biru'
 (The lover who wears the blue shirt/blouse)

The fifth and sixth lines are just the chorus; something like 'Vive la, vive la, vive L'amour' in the song 'Vive La Compagnie'.

The 'pantun' type of Malay song, generally speaking, is flexible. The first two lines can be changed if the singer wants to; just as long as the rhyme of the song is maintained, the structure of the song will not be spoilt. This song can be sung by many people. The atmosphere of the song changes if sung by different people. For example, if it is sung by the lovers themselves, it gives the reader the feeling that he or she is searching for her 'sweet-heart'. If it is sung by a third-party, the reader is given the feeling that the singer is indirectly using this song to tease the young couples.

It can also be considered a children's song. If the song is sung by the former, the word 'Nona' has to be changed to 'Saya'(Me), but if it is sung by the latter, the above song is used without having to change any words.

Malay love songs seldom have a sad touch because in the Malay Sultanate period, the sultana had to be entertained almost every day. As such, song-writers were ordered to compose merry songs which usually have a fast tempo.

The songs were mostly in the 'pantun' form. This type of Malay song is usually fictitious and it does not contain so much of the composer's experience or feelings as we can find in 'Annie Laurie' or 'My Love Is Like A Red,Red Rose'.

As was mentioned before, the song must be a happy song, the composer's writing ability is very restrained and so, the songs become stereo-typed. Also, Malay songs were seldom long for fear that the sultan might get bored with the song. English songs are usually relatively long and detailed too.

On the other hand, songs like 'Sucking Through A Straw' is quite like 'Ca Ca Marica' because it is light, merry and entertaining. Malayan patriotic songs or songs about war were not heard because during the sultanate period, it was a 'must' to sing only 'Merry Songs'. Therefore war songs were not popularized. Then patriotic songs are considered sensitive issues and so seldom composed.

BENGAWAN SOLO

Bengawan Solo, Riwayat Ini
 Sedari Dulu Jadi Perhatian Insani
 Musim Kemarau, Tak Seberapa Air Mu
 Dimusim Hujan Air Meluap Sampai Jauh
 Mata Air Mu Dari Solo Terkurung Gunung Seribu
 Air Mengalir Sampai Jauh Akmirnya Kelaut
 Itu Perahu Riwayat Mu
 Kaum Pedagang Selalu Naik Itu Perahu

'Bengawan Solo' is the name of a river. This river caught the attention of many people because of the importance to traders.

During a drought, it has little water and during the rainy season, the river overflows with water. As the river is the only line to other countries, during the drought, when the river is small, business is bad and vice versa.

The structure of 'Bengawan Solo' is different from that of 'Ca Ca Marica'. It has no 'pantun' verses, rhyme is not stressed and the meaning of every single sentence is connected to the others. The pattern is more like the songs we sang in your class. But nowadays the second pattern is getting more popular and slowly the difference between Malay and English songs are disappearing.

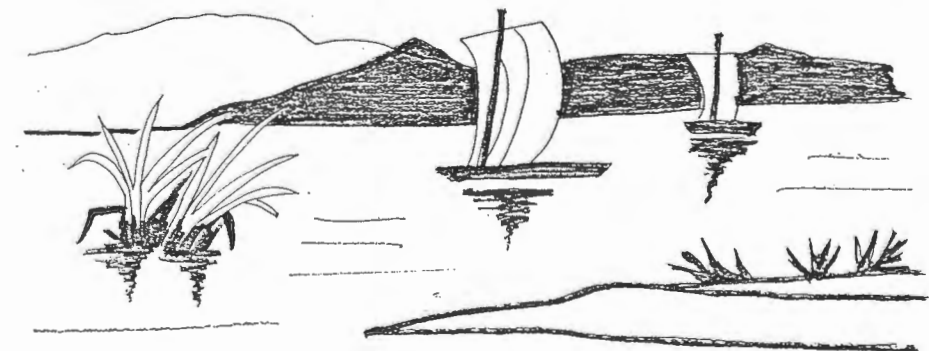
(A student studying at Kobe University)

For Your Information:

ブンガワン ソロ

かわらぬは ソロのながれ
 いわれを秘めて 今日も流れる
 乾燥期は 水かおけど
 雨期はゆたかに あふれ流れる
 緑の深山に 囲まれた氷上
 流れてついに 海に注ぐ
 すぎし日を 語るように
 商売の舟 今日も漕ぎゆく

澤川圭一 訳詞



人事異動

57年10月1日	独 語 講 師	原 克	採 用
57年10月16日	英 語 助 教 授	井上 健	昇 任
57年12月31日	用度掛 文部事務官	伊藤 直子	辞 職
58年1月1日	地 学 助 教 授	宮田 隆夫	昇 任
58年3月31日	英 語 教 授	前野 繁	辞 職
58年4月2日	文 学 教 授	小島 輝正	4月1日限の停年退職
58年4月2日	文 学 教 授	和田 實	4月1日限の停年退職

学生自治会との交渉経過

(1982年8月18日～1983年1月26日)

10月13日	場所：A棟1階応接室 出席者：学生側 自治委員長および自治委員 大学側 美崎教養部学生委員長および学生委員全員 連絡事項：○ロッカーの件 ○選挙用ビラの撤去について ○B棟入口およびロビーの開放について	○ブルーコピーの件等。 交渉内容：○学生自治会と学生委員との交渉に際しての原則の確認（出席者資格、要望書の書式および提出期限、発言、交渉時間等について）○六甲祭期間中の休講措置および六甲祭に対する援助等について。
--------	--	---

第二課程学生自治会との交渉経過

(1982年8月1日～1983年2月15日)

82年10月16日	車輛入構規制及び寮食堂問題についての要求書を受理。(注1)これに対する部長回答書は別紙(1)を参照。	10月27日	26日付の要求書に基づき話し合いを行なう。大学側、二課程委員及び二課程係長(5名)。学生側6名。
10月18日	備品要求書を受理。(注2)	10月28日	輪転機に関する要求書を受理。(注4)
10月26日	II課程祭に関する要求書(注3㉔)及び趣意書(注3㉕)を受理。	11月9日	ファックス機に関する要求書を受理。(注5)

(注1)

要 求 書

1982年10月16日

神戸大学教養部長 井沢義雄殿
神戸大学教養部第II課程自治会
執行委員長 []
貴当局に対して下記のとおり要求する。

記

- 車輛入構規制について
イ 現在、六甲台全学部において、とりわけ夜間において行なわれている車輛規制について、どう考えているのか。
ロ 教養部においても、昼間は車輛入構規制が行なわれているが、その実体と、これまでの経過。
ハ 相互乗り入れをする教養学部生が六甲台学部への入構を拒否されているが、これについて、どう考えているのか。
- 寮食堂問題に関して
事務室において10月1日付、学生部発行の「当面する学寮問題について(その2)」というビラを全II課程生へ配布しようとしているが、これは、学生部当局の寮生との話し合いを無視した、まったく一方的で不当なビラである。
このビラを配布するようになった経過と、教養部当局の寮食堂問題に関する考えはどうか。
- 上記1,2について、10月23日までに文章で回答されたい。

(注3㉔)

要 求 書

1982年10月26日

教養部 殿
例年同様本年度もII課程自治会とサークル連合が中心となってII課程祭実行委員会を設置し、委員長に [] を選出しました。前出の趣意に沿った形で私達の文化の創出の新たな一歩としてゆきたいと思います。今年度も厳夜祭という名称で11月10日より11月14日にかけて、スポーツ大会、映画上映会、コンパ等の催しを行なうことになりました。
日程、企画については下記の通りですが、私達の財政では困難であると思われるので、貴学部から例年通りの援助をしていただきたいと思ひます。

記

11月10日	映画会
11月11日	スポーツ大会
11月12日	映研映画上映会
11月13日～14日	オールナイト企画 (コンパ、模擬店出店等)

尚、教養部に下記の通り休講措置を要求します。

記

11月10日	2限目	映画会
11月11日	2限目	スポーツ大会
11月12日	2限目	映研映画上映会

(但し、11日のスポーツ大会、13日の合同コンパは1限目の授業を15分間短縮をお願いします。)
II課程祭実行委員長 []
教養部第II課程自治会委員長 []
II課程サークル連合委員長 []

(注2)

備 品 要 求 書

1982年10月18日

神戸大学教養部長 井沢義雄殿
神戸大学教養部第II課程自治会
執行委員長 []
下記のとおり備品を早急に要求します。

記

蛍 光 燈 40ワット、120cm 8本
(東芝ネオライン白色ラピッドマスタ
-FLR40S・W/Mか、同型のもの)
以上

(注3㉕)

趣 意 書

1982年10月

教養学部殿
我々神戸大学II課程生は現行の教育体制から来る学生の画一化現象が顕著に現われつつある現代社会の真直中において、尚かつ一般学生に比べ時間的制約を受けるために、ともすれば若者の特権である旺盛な意欲と鋭い感性を失ってしまう恐れがあります。そこで、以上のことを避けるためにも、常に自由な思想と創造への意欲に満ち溢れるII課程祭を開催したいと思います。
今年も夜間部の大学祭的規模で行なうことになりましたが我々の貧しい財政ではなかなか困難ですので貴学部からの配慮と援助を切にお願いいたします。

II課程祭実行委員会
委員長 []

(注3㊦)

要 求 書

教養部殿 1982年10月27日
例年同様本年度もサークル連合とⅡ課程自治会が中心となってⅡ課程祭実行委員会を設置し委員長に [] を選出しました。前出の趣意に沿った形で私達の文化の創出の新たな一歩としてゆきたいと思

います。今年度も厳夜祭という名称で11月10日より11月14日にかけて、スポーツ大会、模擬店等の催しを行なうことになりました。

日程、予算については下記の通りですので、資金面、現物支給での援助をお願いします。

記

1 日程について

- 11月10日 映画会
- 11月11日 スポーツ大会(バトミントン、ソフトボール)
- 11月12日 映画会(映画研究会「42.195キロ」)
- 11月13日~14日 オールナイト企画(コンパ、模擬店等)

2 使用教室の許可願について

- 11月10日 教養部体育館(18時30分~22時)
- 11月11日 教養部グラウンド(18時30分~22時)
- 11月12日 談話室(19時より) B 101(19時より22時)
- 11月13日 Ⅱ課程生施設 B 101, B 103, B 104, B 207, 休養室

3 予算援助について

これは自治会とサークル連合の一環した活動として行ないます。そこで貴部からの金 120,500 円の援助をお願いいたします。尚、明細については次項に記載します。

○支出について

ポスター代	60,000
スポーツ大会(賞品代等)	20,000
映画代(自治会)	30,000
映画代(映画研究会)	85,500
模擬店(プロパン等の火気使用料)	20,000
雑費	20,000
合計	235,500

○現物支給について

ファックス原紙(堀井 Fax Stencil Sheet)2シメ	
ゲイハ用インク	1 缶
中質紙	6シメ
ポスターカラー(大) 250 C C	赤 2 個
"	青 2 個
"	黒 1 個
コピー用紙 プラス B 4	3シメ
コピー液 プラス現象液 1 l	1 個
模造紙	100 枚
セロテープ	3 巻
ガムテープ(布)	3 巻

*特にスポーツ大会に関して

シャトルコック(カールトン)	3 ダース
上質紙	4シメ
模造紙	100 枚
えんぴつ	3 ダース
Ⅱ課程祭実行委員長	[]
Ⅱ課程サークル連合委員長	[]
教養部Ⅱ課程自治会委員長	[]

(注4)

要 求 書

1982年10月28日

神戸大学教養部長 井 沢 義 雄 殿
神戸大学教養部Ⅱ課程自治会
執行委員長 []

以前より輪転機の調子が悪く10月20日輪転機の定期点検に来られた業者の方にオーバーホールの必要性があるとのことで、これからの円滑な自治会活動を運営してゆくためにも、輪転機のオーバーホールを要求します。

同時に、修理に出ている期間中の代替りの輪転機をも要求します。

なお、点検にあたった業者名と、修理箇所を附記しておきます。

(業者名)

[] TEL []
営業課 []

(修理箇所)

- 1 プレスロール
- 2 インクネリロール
- 3 綿布(スクリーン)
- 4 インクポンプ
- 5 ベルト
- 6 その他部品

以上

(注5)

要 求 書

1982年11月9日

教養部長 井 沢 義 雄
神戸大学教養部Ⅱ課程自治会
委員長 []

- ① ファックス機の修理
- ② ファックス機が修理に出ている間の代替りのファックス機

以上2項目を早急に要求します。

以上

別紙(1)

回 答 書

1982年10月22日

神戸大学教養部第二課程学生自治会
執行委員長 [] 殿
神戸大学教養部長
井 沢 義 雄

10月16日付貴自治会の要求書に対し、下記のとおり回答します。

記

1 車両入構規制について

イ 現在神戸大学では、各部局がそれぞれの実情と必要に応じて独自の対応策をたてている。六甲台地区(法・経・営)では許可制をとっていると聞くが、この方策につき他の部局の措置を批判することは適当ではない。

ロ 教養部では昼間、四輪車については許可制をとっている。二輪車については届出制をとっているが、危険防止、駐車スペースの問題、教育環境の維持等の見地から、極力自粛を求めている。

ハ 前々項とおなじで、他部局の決定した措置を批判することは適当ではない。だが、学生の方から事情を訴えて要望を出すことはできるのではないか。

2 寮食堂問題に関して

件のビラ配布に関しては、学生部から全学部に配布方を依頼されたものである。場合(入学時など)によっては、教養部が学生部に配布方を依頼する件もあり、こうした面での全学的協力を教養部だけが拒否することはできない。

この問題についての学生部見解と方針は、基本的には全学の各教授会で諒承されているところである。教養部としては慎重かつ柔軟な対応を要望しておいたが、この点学生部の方策に反映されていると考える。

— 編集後記 —

七年前に教えた学生から来た年賀状に次のような文章を読んで正月の気分が一層爽やかになった。

「今東京で研修させていただいています。全国各地から来た仲間と共に多くの先生方に学び、色々な人に出会い、忙しくても充実した毎日です。今年も初心を忘れず、明るい笑顔の似合う女医さんとして病める人々と共に歩みたいと思っています。」

一年生の秋に体調を崩し一時は痛々しい程に痩せ入院もした彼女であったが、長い修業期間をくぐり抜けて今漸く飛び立つ時が来たのかと思うと深い感銘を覚えた。

試験のために棒暗記をするのと違って、一つの知を自分の血肉も同様のものと化するには長い期間に亙る持続的な努力が必要である。将来の自分の持場から清涼の気を周囲に及ぼし得る人間になるために新入生諸君には元氣よく学びのスタートを切っていただきたい。又その道程で百五十余名の教養部のスタッフを利用しつつしていただきたい。

原稿をお書き下さった方々にお礼を申し上げますと共に、定年退官その他で教養部を去られる諸先生の今後のご活躍とご健康をお祈りいたします。(MS記)

